

We

4

2004

特集 地域で取り組む 男女共同参画



【インタビュー】池田 政子さん
男女共同参画～山梨からの発信

20歳になった日本女性会議
——市民と行政のパートナーシップの行方を考える
松田 常子

■連載 ■ “覚醒”と“自立”のための「ジェンダー論」 沼崎一郎

いつのまにか元気になれる場所 フェミックス

●あなたの視野を広げます。

月刊誌「くらしと教育をつなぐWe」を発行。
A5判 64頁・680円・年間講読料7500円(送料込・年10冊発行)

●あなたの表現活動をサポートします。

単行本、ハンドブック、会報、パンフレットなどの制作をお手伝いします。

●あなたの悩みを共に考え、自分らしく生きることを応援します。

個人カウンセリング1時間6000円(予約制)。自己主張トレーニング、各種ワークショップを企画・開催しています。お気軽にお問い合わせください。

★通信制AT/自己尊重講座

フェミックスでは一人でもできる「通信制のAT」を行っています。言いたいことがうまく言えない方のために、自分を整理し、自分なりにアサーティブになれるように、おひとりおひとりに合わせて課題を出します。回数は12回、期間は、12ヶ月～18ヶ月。料金は35000円です。

●フェミックス電話相談 TEL 03-3424-3814

※時間帯：月～金(土日祝日を除く)10:30～18:00 ★電話番号が3月から変わりました。
前もって予約していただければ、これ以外の時間帯でもご利用可能です。
※利用料金：30分以内は3000円 30分～60分まで6000円
相談終了後、振込用紙をお送りしますので、1週間以内にお振込をお願いします。

からだで感じるエンパワメント

女性のための自己防衛プログラム WEN-DO ウエン・ドゥー

★初心者向けワークショップ

4月3日(土)、6月12日(土) 両日とも13:30～16:30(受付13:30)

会場=国立オリンピック記念青少年総合センター

カルチャー棟13号室(4/3) カルチャー棟25号室(6/12)

講師=大沼もと子 参加費=1回3,000円 定員=15人(要予約 先着順)

※参加は女性に限らせていただきます。

飲料水とからだをしめつけない動きやすい服装で参加してください。

04年4月～開講 自己主張トレーニング(AT)

言いたいことを言えず我慢していませんか?

もっと自分を主張してもいいのでは?

全12回(毎週火曜日) 午後6:30～8:30 会場=フェミックス

講師=大沼もと子 参加費=12回で3万円 定員=10人(要予約 先着順)

トレーニングの内容……ほめる 頼み事をする 断る(ノーを言う)

苦情を言う 気持ちを表現するなど

★いずれの講座も、お申込み・お問い合わせは、03-3424-3603 大沼まで。

講座の
ご案内

詳細はお問い合
せください。

◎お問い合わせ・お申し込みは下記までどうぞ

Femix
フェミックス

TEL/FAX 03-3424-3603 E-mail info@femix.co.jp

〒154-0001 東京都世田谷区池尻3-2-3-703

東急新玉川線(渋谷より1駅3分) 池尻大橋駅下車西口より徒歩1分

ホームページ: <http://www.femix.co.jp>

郵便振替00130-7-754314 みずほ銀行 池尻大橋出張所 1501277

フェミックス電話相談 TEL 03-3424-3814

フェミックスは出版と
フェミニストセラピー
によるカウンセリング
を事業の両輪としてい
ます

特集 地域で取り組む男女共同参画

【インタビュー】 池田 政子さん

男女共同参画 ～山梨からの発信

2

20歳になった日本女性会議

—市民と行政のパートナーシップの行方を考える 松田 常子 14

■女と男の家庭科新時代

新・オホーツクの潮風荒く 江口凡太郎 22

授業実践□家庭科 風がわかる 匂いがわかる
「家事労働」について考えよう
その3 女性は昔から主婦だった?

藤井 徳子 23

覚醒＃と＃自立＃のための「ジェンダー論」

沼崎 一郎 31

—女子大での教育経験から 第6回 ビルを飲まずにHをするな!

曲がり角の家庭科【番外編】

「食」を通した福祉コミュニティ～「ひまわり」訪問記

梶原 公子 36

「ひまわり」の日々

第1回 私ののみず物語

入江 一恵 40

カトーさんの授業スケッチ (11)

“言の葉カレンダー”の巻

加藤 昭仁 42

■連載

女が歳をとるとということ 第81回 気ままな人 木村 栄 44

わがまま映評 第11回『幸せになるためのイタリヤ語講座』 満田 康子 46

乱読大魔王日記 第51回 冠野 文 48

過去を振り返らない/先を考えない 第40回
では、またあとで御寄りしますわ

松本 一郎 50

みんなで楽しく政治をしよう! 第1回

鈴木めぐみ 52

仕事場の周辺から 第1回

支えあいSOHOのハッピー度

石渡 秋 54

私の好きな言葉 第1回 《楽》

二見れい子 56

●本の紹介 58

●Weフォーラム2004 in 博多 62

●編集後記 63

男女共同参画 ～山梨からの発信～

聞き手・まとめ／稲邑 恭子

山梨県立短期大学の池田政子さんが送ってくださった『0歳からのジェンダー・フリー 男女共同参画山梨からの発信』（生活思想社）を読んで、地道に地域に根付いたジェンダーフリー教育の実践をしていらっしゃるかたたちがいるということに新鮮な驚きを感じた。〈ジェンダー・フリー〉というテーマで出会ったたくさんの人々のエンパワメントの物語が、そのまま山梨の男女共同参画の地域づくりの貴重な足跡になっている。研究室にお訪ねして、ていねいに軌跡を記録し分析した報告書や実践記録も見せていただいた。大学の教員が自らの持てる資源をフルに使い、地域の人材育成とネットワーク形成の中心となっている稀有な事例。ここまでできるのだなと感心しつつ、ここまで費やしたであろう膨大なエネルギーを思う。



池田 政子さん

(いけだ・まさこ)

山梨県立女子短期大学教員。専攻はジェンダー心理学。

編著者に『0歳からのジェンダー・フリー 男女共同参画山梨からの発信』（生活思想社、2003年11月）。

* 「平成14年度 男女共同参画アドバイザー養成講座」報告書をお分けできます。ご希望の方は下記あてに240円の切手を貼り宛名を書いたA4判の返信用封筒をお送り下さい。

〒400-0035 甲府市飯田 5-11-1 山梨県立女子短期大学 幼児教育科 池田政子
E-mail: psyche@yamanashi-ken.ac.jp

男女共同参画◎山梨からの発信

稲田 男女共同参画の事業は地方では伝統的な女性団体が担い手になることが多く、なかなかうまくいかないと聞いていましたので、この本（『0歳からのジェンダー・フリー』）を読ませていただいたときに、こんなことができるのかとびっくりして。地域の大学がコ―ディネート機能を引き受けるケースはあまり聞いたことがないのですが、だからこそ、このような質の高いものができたのではないかと。

池田 質との関係はともかく、確かにあまりないと思います。この文部科学省の委嘱事業（『0才からのジェンダー教育』推進事業）は、全国から応募があり、いろいろな団体が委嘱を受けましたが、地域の自主グループが見事にやった事業もあり、自治体の女性学習担当者が核になって動かした事業もあり、ほんとうにさまざまでした。その地域にどんな蓄積がどれだけあるか、もろに分かる感じでした。山梨の場合は、男女共同参画の取り組みを地域で実践している人でも、まだ乳幼児期にはあまり注目していない状況だったので、大学の研究者が呼びかけ、事業のコーディネート

をしたということですね。もちろん、「女性学入門」のような科目を全国的にはかなり早く開講するなど、女性問題に関心のある教員がいて、「男女共同参画アドバイザー養成講座」というような生涯学習講座も続けていたこと。そういう下地があったから、できたのだと思います。

稲田 女性学の講座を開講したのはいつからですか？

池田 九二年です。こういうことって、関心がありそれをやってみようという教員がいないとできない。しかもひとりではだめで、「やりましょう」と言ってサポートする仲間がいないとできませんよね。「女性学入門」を立ち上げたのは、私の前に「男女共同参画アドバイザー養成講座」の実行委員長だった米田佐代子さんです。女性史研究の草分けの方で、都立大の教員だったのですが、九〇年に私たちの大学に着任しました。私も以前から女性問題には関心をもっていて、一般教育に女性学を入れたいとは思っていたのですが、自分ひとりではできなかった。それが、彼女が来たことで、やろうということになって、三、四人で始めたんです。

八〇年から、うちの大学には「特別受講生制度」と

いう、地域のかたに無料で授業科目を聞いていただくシステムがあつて、それで「女性学入門」も地域の方に関わっていたのですね。ちょうどその頃、文部省が女性学習の振興ということで補助金をつけ、全国規模で、女性問題をテーマにした学習が展開されました。山梨県では「やまなしウイメンズカレッジ」という名称で、九〇年に第一回を私どもの短大で実施しました。そのあと県内の大学が、持ち回りでやろうということになり、九六年と九七年にもう一度引き受けました。その前後から女性問題に関心のある地域の女性たちが、私どもの大学に出入りするようになりました。

「ウイメンズカレッジ」は、米田さんが、「講師を呼んできて、ただ聞かせて終わる講座は時代遅れだし、受講生に力がかからないからそうでないのをやりたい、参加型の講座にしたい」といろいろ工夫してくれて。私も、男女共同参画という面だけでなく、大学は地域の「資源」だから、地域の方にフィードバックしていくことが大事という意識が比較的若いときからあったので、彼女に共鳴しました。彼女と一緒にやりながら、講座の企画や運営のノウハウ、そもそも女性が学ぶことの意味、実践にどうつなげて行くのかなど、たくさんのお話を学ばせてもらいました。

自分自身も県の女性行動計画の委員をやったり、また国の補助事業で女性学習のプログラム作成をしたとき、委員もしていました。このときの委員長は山梨学院大学（当時）の宮坂広作さんでした。一回の講座でも、その組み立てや内容は、いわばその人のクパテントクだということ、だからこそ、たった一度しか出会わないかもしれない人に、自己変革につながるような深い学びをしようというプログラムが必要なんだということ、教わった気がします。

二五年以上前、幼児教育科の教員として、保育者になる若い女性たちに児童心理学などを教えることになりました。そのときに、私がここにいることの意味は、女性問題（まだジェンダーという言葉は一般的ではなかった頃です）やセクシュアリティ、性教育という視点から彼女たちに関わることだと思いました。からだの問題はウーマン・リブのときにすごく影響を受けていましたので、男女が社会的に平等になってもセクシュアリティのところでは平等にならなければ、という意識がすごくあったのですね。

稲田 リブには関わっていらしたのですか？

池田 私はいわゆる「団塊の世代」で、リブのときはやっていません。でも、自分の育ちの中でいろいろ

思うことがありました。私の母は、昭和二十年代の初め二十歳で結婚して、いわゆる舅、姑、小姑がいる家に来て、子どもに何か買ってやりたいと思っても自由になるお金がないし、少しでも家族が豊かになるようにと、編み物や洋裁を勉強して資格を取り、家で編み物教室を開いたんです。それを、父が帰ってきたときに母が楽しく生徒さん（若い女性たちですが）と話す声が聞こえたりすると、「俺の稼ぎじゃ足りないのか」と機嫌が悪くなったりするのを目の当たりにして育ってきました。家族のためにいろいろなことをしている母がどうしてそんなに我慢ばかりして、口答えもせずになくしてはならないのだろうか、子ども心ですごく不思議だったんです。そういうふうには、個人としての父を嫌うという感じで育ってきて、中学に入ったら、職業科と家庭科と分かれていて、「女は家庭科だ」と言う。私それを知らなくて、はじめてそれを知ったとき、泣いて家に帰ったんです。私は、祖父がとび職だったこともあり、製図などがある「技術」をやりたかったのに、とてもくやしかった。

女の子がこの段階ですでに、職業というものから遠ざけられて、あなたたちは家庭科、女の子は家庭に入れと言われてしまうんだと。それが世の中の仕組みと

の初めての出会いでした。だけど、その時点ではまだ、私の中では、女と男の問題は自分の家族という個人的なものとしてあったのですね。それが、大学に入ると、大学紛争の真っ只中で、リブの運動も盛んでした。大学院生のとき、研究室の先輩の女性が、田中美津さんの会合に連れて行ってくれました。そのときに美津さんがマスターベーションなど自分の性的な体験のことを話していて。私は性のことにあまり向き合わずに来ていたので、彼女が人前でそういう話をするのことに對して、すごく嫌な感じしかなかったんです。帰りに寄った新宿リブセンターも、雑然としていて台所はごみの山。それを見た先輩の彼女がすつと流しに立って、洗い出した。誰かが自分に代わって運動をやってくれているのだから、自分は直接関わることはできなくても、ここに来たときくらいは支える役割をしよう——そういうことが自然にできる彼女だったのだと、これはあとから思ったことですが、当時はそのことの意味もわからずに、なじめずに帰ってきました。

あのとき、なぜ美津さんが性的な体験をみんなの前でしゃべらなければならなかったかが納得できたのは、そのあと、『いのちの女たちへ』を読んだときです。学生結婚をして夫との関係や子育てなど、いっぺ

んにいろんなことが降りかかったとき、やっと、美津さんの書かれたこと、あの場で話されたことが、自分のくらしのなかでどう位置づくかがわかった気がしました。「自分のからだは自分のもの」ということが、そうじゃない現実の中で、ものすごくよくわかって。ですから、リブ関連の古い雑誌類がいまだに捨てられず、とってあります。

先輩が連れて行ってくれたことがきっかけで、ようやく自分の中で、「パーソナル・イズ・ポリテイカル」ということ、個人的なことと思って悩んでいたことが、社会的な仕組みの中に開いて考えていくべきなんだとわかったんですね。その先輩は県立新潟女子短大で教えながら、私には考えられないようなバイタリティで地域のいろんなことに取り組んでいたのですが、十年ほど前に四五歳で亡くなりました。私にとって大事な人でしたので、ほんとにそのときにはショックでした。

この短大に来て学生たちと接してみたら、ほんと、バリバリの「女の子」なのに驚いて。その頃、保育者になりたいという人は、「ほんとはおうちでお母さんに可愛がってもらわなければならぬ子が保育所でさびしくしているから、私が代わりに面倒見てあげたい」という目標の学生ですから、ある意味では保守的

です。そこに米田佐代子さんが入ってきて、仲間がはじめてできた。彼女が核になる存在として入ってきてくれたために、「ただ考えていただけじゃだめ、組織的に大学としてやっていこうよ」ということで、「ウイメンズカレッジ」を二年開いたのですが、その間に県教委が山梨学院大学に委託し九六、九七年と「男女共同参画アドバイザー養成講座」を先発していました。リーダー養成ということで社会教育の関係者、女性団体のリーダーを中心に声をかけて、宮坂広作さんがひとりでゼミ形式の連続講座をおやりになっていたのですね。そのあと県内の大学持ち回りということ、県立女子短大が二年間することになったのです。

その前の「ウイメンズカレッジ」には、必ずしも社会教育や伝統的な女性団体の関係者でない方たちがいらしていました。企業に勤めている方や、専業主婦の方も来てくださった。山梨はその当時、大卒女性是非常に少なく、社会人入学の制度も今ほど奨励されていない時代でしたから、大学に行きたいと思い、大学の先生から教えてもらうことに価値を見出す方も多かったのです。受講生の感想にも、「一介の主婦である自分が大学の門を堂々と潜れ、そこで学べる愉しさはすばらしい」という感想があるくらいのものでした。

「ウイメンズカレッジ」は受身の〃承り学習〃ではなかったので、受講生と教員との関係は熱かったわけです。それで、「県短は次は何をやるの？　ここでお別れするのは惜しい」と、アドバイザー養成講座を引き続き受講された方も多かった。また九三年に山梨県は「女性いきいきアドバイザー」の制度（市は二名、町村は一名で、女性政策について住民と行政を結ぶ役割）ができたので（いまは、「男女共同参画推進リーダー」になっっています）、そういう方たちも来てくださいました。現在、山梨県の市町村の男女共同参画プランの策定率は全国六位ですが、ちょうどその頃、それまで地道に活動してきた女性たちが自分たちの地域のプラン策定という目標ができて、そのための学びの場が求められていたと思います。それで、私たちの大学で実施したアドバイザー養成講座には、県内各地、職業も経歴も本当にさまざま受講生が集まりました。

二年間のはずが六年続いてしまったのは、うちの次に引き受けるはずだった大学が、そんなやり方の講座は大変でとてもできないとお断りになったからです。私自身、やる意欲があり価値もわかっていたのですが、土曜日が連続でつぶれるし、正直言って大変でした。最初は五月から夏休み前で終わる予定だったのが、後

半にテーマを決めて自主研究し発表するというプログラムを入れたら、受講生から時間が足りないと言われ、夏休みを挟んで九月に発表し、又エック（国立女性教育会館）の女性学センター研究フォーラムにも行くことにしました。夏休み中に自主学習の時間を設けて、私たち教員が交代で出てサポートしました。二年目からは正規の講座は土曜日十回、グループ学習を何回か、自由参加の技術講座と又エックへの「ジェンダー研究ツアー」というスタイルができました。職務上は振り替えができませんが、実質は休みが取れない。からだが休まらず半年続けるわけで、正直言って、なぜこまでしなればならないのかと思つたこともありました。

ただね、そうは言いながらも、やっっているうちに体も気持ちも慣れました。米田さんは実行委員長を二回やって定年に。その後を引きついで委員長をやつて見ると分かつたんですよ。いかに大変かということ、いかにやりたいことが次々出てくるかということが（笑）。

ちよつと無理かなと思うようなことをプログラムに入れても、受講生がやってしまう。そうすると、自分たちは受講生を侮っていたかと、またひとつ新しいこ

とを入れる。そうするとまたハードルをらくらくと越える受講生がいて、毎回こっちが試されている感じがです。リピーターがいるので、白紙の状態から始まるわけではない。大学でいえば「七年生」までいますから、講座初回からグループ・デイスカッションがはじまる。初めて来た方はびつくりするようですが、結構話し合いができて、しかもそれだけでなく話し合ったことを発表してまとめたりする。そういうことが、リピーターがいることで、できるんです。

稲邑 リピーターのかたの比率は？

池田 半数のときもあれば三分の一のときもある。そのリピーターもさまざまで、毎年の人もいれば、一、二年空いてまたという人もいる、まだら式。そういう人が行動モデルとして、初めての方にいろいろ見えないメッセージを送って、お互いに学び合っているのだと思います。

稲邑 リピーターが来ると毎回新しいことをやらなければ。

池田 そうですね、でも、私も二度同じことしゃべりたくない人なので（笑）。

リピーターの人をあてこんで講座を組んでいるし、そのかたたちが来てもいいように、前半を全体学習に

して、新しい情報がほしいが自分がやりたいことが決まっているリピーターのために、自分で学習や研究のテーマを選べるコース学習を用意しています。それが保障されている。県内市町村職員の男女共同参画に関する意識調査や、全市町村の広報誌をジェンダー視点でチェックした調査研究もあり、県行政がしてもよいようなことをどんどん住民がやって、それをまた地域に戻していくし、報告書の中できちんと記録に残っていくわけです。とても貴重な活動を受講生が自主的にしている。学んで実践するというのはこういうことだなあと、教えられる気分です。二年前には「やまなし女と男ネットワーク」という修了生のネットワークができ、文科省の委託事業をしたり、県内各地で活躍しています。

稲邑 人材が育って、リーダー養成になっているんですね。確かに大学の社会人入学の門戸は広がり、女性の就業機会も増え、生涯学習での女性学華やかなり十年前と比べて、女性学を学びたいと思う主婦のニーズは減っている。その意味で、首都圏では、子育て世代を除外すれば、生涯学習の講座に参加される方の大半は、ひところのような社会に出たいという切迫感

はなく、子育てが終わり、これから自分は どうして生きていけばいいのか、と漠然と感じてこられるかたちです。

池田 でも、そういうかたたちにどういういうきかけを与えるかというのは大事なことでないでしょうか？ 山梨では、パートに出るか子育てでなかで、そういう層のかたは少ないと思います。でも、そういうかたが地域づくりにかかわれるようなエンパワメントのしかたを考えるという戦略を、社会教育がもつことは必要ではないでしょうか？

稲邑 そうですね。そういう意味で、リーダー養成とかいう大それた言葉は使わなくてもいいのだけど、地域を変えていく主体になる人を育てるような講座を企画してくださればいいと思うのです。でも、少なくとも首都圏ではほとんどそのようには機能していない。

池田 山梨と大都会の差があるでしょうね。いま山梨で子育てサポーターの講座やると、人はたくさん来るわけです。企業がやっている託児はまだ少ないし、ファミリーサポートセンターもこれから増えると思いますが、いまは全県で二箇所だけ。でも、ちょっとしたときに子どもを預かってほしいというかたはたくさん

いますし、逆に子どもを育て上げた夫婦で子どもを預かりたいとか、地域の子どもたちと接したいか思っているらっしゃるかたも結構いる。そういうかたたちを活かして、子育て支援とドッキングさせていくというようなことも山梨では広がっています。

稲邑 それは非常に現実的ですよ。そういうふうな地域をよくするとか、改革につながるようなことができると思います。

池田 企画する側にももちろん責任があるとは思いますが、都会では、そこで暮らしている人にとつて地域がものすごく見えにくくて、自分が動いたことが、どんな結果を生み出したか実感できないせいもあるのではない。

稲邑 東京は情報にアクセスしやすいけれども、それだけ風化が進みやすい。

池田 地域で提供しなくても情報にアクセスできるということですよ。でもそれだったら、むしろ情報にアクセスしにくい人たちに積極的に「出前」をしていくとか、自主的な子育てサークルがあればお金を回して講師派遣をするとか、そういう地道なやり方は考えればいくらでもあるはずでしょう。

稲邑 都会では組織が大きすぎて、企画する行政の

担当者が、何が必要とされているかをキャッチしてそれに応えていくということができにくいこともあると思います。池田さんたちのように、大学の教員がコーディネートしていけば、こちらへんが必要だなとわかりながら次のことが出せるわけですよ。結果も見えて、課題も見える。

池田 これは小さい県だからできるのだと思うのですが、米田さんなり私なりが男女共同参画プランの審議会などに入っていて、県の行政ともやり取りができる。また県立の女性センターの講師や運営協議会の委員をしていて、そこからも情報が入る。それから、あちこちの市町村の講座に依頼されて出かけていき、男女共同参画とか子育てや性教育の話をする。それで地域のことも少しはわかる。そんなふうにいるんなレベルでアンテナが張れて、情報が集まってくる立場にいる。そして、それが全国のレベルと比べてどうなのかを評価する視点も、研究者という立場で持っているということですよね。たとえば、受講生は県内の、あるいは地域のこととは知っているけれど、全国的に見て自分たちがどんなにすばらしいことをやっているかを知らずにやっているわけです。そういうことも私たちが価値付けとどうか客観的な評価をして、それを受講生

のかたに返してあげることができる。「そんなこと他ではやっていないから、胸を張ってワークセッションに行きましょよ」と言えるわけです。このことは、大学がやり、行政とも、いろんなグループの人ともつながり、キーパーソンとして研究者が関わっていること、とても大きな利点だと思います。そして、そういうことをする教員が一人で終わらずに続いていることも大事です。次の方たちを育てるというのも、自分の役割だと思っているんです。

米田さんがやめるときに「私は定年が見えているから全力疾走するが、あなたはたいへんね」とおっしゃった。そのことの意味が言われたときはわからなかったのですが、今つくづくその重みを感じています。

保育者養成と男女共同参画に関わる ネットワークがリンクした

稲邑 保育のネットワークをもっていらっしゃるのは強みですよ。

池田 山梨県立女子短大は平成一七年度から四年制大学になります。最初ここに来て児童心理学を教えるようになった当初は、修士論文のテーマとも違いまし

たし、とまどいました。でも、すぐ思ったことは、ここがまず女子短大ということでした。来た当時、山梨では高校を出た女性の六人に一人くらいしか、短大を含め進学しない時代でした。県立女子短大を作った知事さんは、〃農村の花嫁養成〃を掲げて議会で通したのです。ところが、実際は卒業生が九割以上も職業についた。その頃は全国で短大を卒業した女性の半分以上が就職していない時代、〃花嫁修業〃という言葉がまだ残っていた頃です。それで、花嫁養成と言ったのに約束が違ふと議会で問題になりました。いまの学長は開学に関わった方なのですが、自立した女性を育てようということ、就職活動も企業一軒一軒、頭を下げて回ったと聞きます。私が着任したのは開校から十年後ですが、母親になる人、かつ保育者になる人、つまり子どもの教育に関わる人の教育なんだというのが大きかった。この人たちを変えていければ、世の中も少しずつは間接的に変えていける芽を育てていけるだろうと。学生たちは、卒業後は保育者として県内各地に就職しますから。

幼児教育科は保育者養成をやっているために、教員同士も日ごろの接触度が高くて、連係プレイがしやすいです。今回の事業の前には、山梨県の保育の歴史を

みんなで資料収集して出版しました。そういう基盤があったので、できたことだったと思います。もちろん、実習や就職先としてかわっていたらだっている幼稚園や保育所とのこれまでのおつきあいがあればこそその事業でした。

この本の著者のひとり、「チャイルドルームまみい」の乙黒いく子さんは、無認可保育所の園長という立場で、幼稚園教諭の免許も取ろうと社会人入学してこられました。町の学習館運営委員や教育委員をされているかたですが、そういうかたが目覚めると、今度は積極的に町の行政に働きかけてくださる。中学校の授業で話をしたり、町立保育所と合同で学習会や子育てサークルの出前講座など、積極的に発信する役割をしてくださっています。

また、子育て支援センター「ちびっこはうす」の宮沢由佳さんも、就園前のお子さんを育てている若い母親たちにとってはカリスマ的存在で、ご自分のネットワークを持っていらっしやる。この人とながれば、そういう女性たちに直接何か伝えられるのではと思いました。でも、最初お誘いをかけたときは「ジェンダーって、先生、それピンクヘルでしょ」と言われた。それが話をするうちに、自分が悩んでいることがまさ

にこれなんだとすごくわかってくださって、それから先はもう、どんどん。去年は内閣府と県が行ったフォーラムのパネリストにもなり、男女共同参画の視点での子育てを発信し、県の審議会の委員にもなりました。ですから、「男女共同参画」が「保育」領域に入っていたのですが、保育の分野で分かってくれる人ができる、その場からまた男女共同参画の視点を取り込んで、ほかのところにも発信してもらえます。そのように、保育者養成に関わるネットワークと男女共同参画に関わるネットワークがうまくかみあって、今回の「0歳からのジェンダー・フリー」事業もできたという事なんです。

女性センターとは、私も講師として担当者と付き合いがあり、この事業も最終的なまとめの研修会をセンターと共催で公開で広くよびかけやりました。そうすると、今までセンターのほうから見えていなかった人材が目に入ってくるわけです。例えば、センターが子育て中の保護者をあまり対象にできていなかったのが、宮沢由佳さんたちの子育て講座をセンターの中でやることで、宮沢さんがご自分の支援センターに来るお母さんたちを対象に「女性センター・ツアー」を組む。そうすると立派な保育室があるのが分かって、お

母さんたちが自分で来て保育室を利用するとか。これは狭い地域だからできるのかなという気もしますが、そういう相互波及効果があるんですね。

女性センターも行政と同じで三年くらいで担当者が交代するのですが、管理職一步手前の教員が男女一名ずつ回ってくる。男女共同参画なんてあまり関わりがなかった人が入ってくるので最初は苦労されるようです。でも教育への情熱にかけては行政職員とはやはり違うので、いったんその面白さにはまってしまえば、あつという間にベテランになって、いろんなアンテナを張って広げてくださる。自分のネットワークを持っている人々が、さらにネット同士をつないでいく人がいることで、さらに広がっていく。狭いところなので話が決まれば早いです。

稲邑 それぞれ興味や分野がちがうネットワークだからこそその強い相乗効果がありますよね。

池田 そうなんです。違うからこそ、いろいろはみだして広がっていく。すでにそれぞれのリボンを編んできた人たちが、この事業をやるということが集まってお互いのリボンが結ばれたけれど、それが終わればまたほじめて、違う人たちとリボンを結ぶかもしれない。

稲邑 これから何か始めたいことがありますか？

池田 実はいま、「三位一体」改革の直撃で文科省の補助金が付かないことになって、来年度も実施予定だったアドバイザー養成講座が、続くかどうかの瀬戸際にあります。今年度、県は「男女共同参画」と「子育て支援」について政策の外部評価を行ったのですが、この講座は今後も継続すべきというA評価が付きませんでした。せっかくA判定をもらったのに国の補助金がなくなつたので、存続が危うくなつたのです。主催の県社会教育課の担当者は、学校現場から回ってきた女性教員のかたで、いかに学校がジェンダーバイアスばりばりの職場であるかというのをわかっているもので、ほんとうに一所懸命やってくださり、走りまわってくださったのですが、結局予算がつかないということでした。それで、何とか続けられないか、社会教育課や女性センター、修了生のネットワークとも相談しているところですよ。そういう中から、また新しい協働の形が生まれてくるかもしれないという期待もあります。

内閣府が委員会を立ち上げて、地方でどんな取り組みが行われているかの調査報告書を今年出していきます(「地方における男女共同参画施策の方向に関する基礎調査 報告書」)、そこに山梨の事例が入っています。それはたぶん大都市以外で市町村プランの策定率が高

いからだと思えます。山梨から、市の職員を二十年やっついて県のシンクタンクの研究員に出向した方が委員に入っているのですが、そのかたがたまたま今年のアドバイザー養成講座に参加されていて、こんな講座をやっていたのか、これが高い策定率の原動力になっているのかと実感されたということで、取り組み例の中で報告をされています。

山梨は人口八八万人という小規模県なのに、つい最近まで六四も市町村がありました。地域ブロックが小さかったから、お互いの顔が見える。もちろんそれは窮屈さや保守性にもつながるのですが、でもいったん動き始めると、結果も見えて達成感もあり、「壁」が何かも把握しやすい。だから手づくりの市町村プランがたくさんできたのだと思います。いま、合併の問題で、そういう状況が変わりつつあります。これまで地域でプランの推進にかかわってきた方たちが、男女共同参画について積み重ねてきたものが合併でどうなってしまうのか、危機感を持っています。○四年度に講座が続けられれば、この問題もぜひみんな考えていたいと思っています。

二〇歳はたちになった日本女性会議

松田 常子

(日本女性会議二〇〇三おおつ 実行委員)

——市民と行政のパートナーシップ の行方を考える——

はじめに

爽やかな秋晴れの空の下、琵琶湖のさざなみが燦々と輝く二〇〇三年一〇月一七、一八日、「いのちの世紀びわ湖で輝け女ひとと男ひと」のテーマで、「日本女性会議二〇〇三おおつ」が開催された。日本女性会議第二〇回目の記念大会である。

日本女性会議は一九八四年、名古屋市で第一回がスタートした。一九七五年から始まった「国連女性の一〇年」の最終年を目前に、「女性差別撤廃条約」の批准をめざす国の女性の熱い声を背景に、世界女性会議の国内版として開催されたのである。以来二〇年、自

治体と市民が共同で実行委員会を結成し、日本女性会議をバトンタッチしてきた。

日本女性会議二〇〇三おおつ（以下、大津大会）は大津市と二二六名からなる実行委員会が共催した。実行委員会は二〇〇一年八月の結成総会に始まり、報告書を刊行した二〇〇四年三月まで二年半、会議に次ぐ会議、作業に次ぐ作業で、膨大な時間や自費、労力を費やす破目となった。五つの部会ごとに多種多様な業務が同時並行で進行したため全体を見通すことは難しいが、実感を込めて大津大会をふり返り、日本女性会議二〇年のあゆみと今後の課題を考えてみたい。

大津大会がめざしたもの

大津大会では、準備部会の提言をベースに、以下の三点を基本方針とした。①男女共同参画社会の実現をめざし国内外の緊急で現代的な課題に取り組むこと、②日本女性会議二〇周年の記念大会にふさわしいテーマ・内容を創造すること、③「大津らしさ」を盛りこむこと。これらの基本方針は、紆余曲折を経ながらも記念講演や基調講演、シンポジウムなどで実現することができ、特に分科会では、①の男女共同参画に関する現在の課題を不十分ながら全分野にわたって網羅し、②については、日本女性会議二〇年の歩みを振り返り、今後の課題を考える分科会と展示を開催、関連資料等を作成した。また、③については「水環境を考える」湖上セツションや近江商人などのテーマで發揮できたものと思う。何よりも琵琶湖畔という大津会場のロケーションが、参加者の感動をいざなってくれた。

日本女性会議二〇年のあゆみ

ここで日本女性会議のあゆみを振り返ってみる。別表の資料は大津大会第一分科会&展示の資料の概略で

ある。(余談になるが、日本女性会議は各都市の持ち廻りのため事務局がなく、過去の大会資料等の保管機関がない。二〇周年にあたり過去の大会の記録作成と資料の展示を企画したが、すでに報告書等を廃棄した都市もあり、資料入手には困難をきたした。大会資料やノウハウをスツクする、なんらかの機関の設置も今後の課題である)。第一回の名古屋市の女性会議は最大規模で内容も多彩、活気とエネルギーに満ちた大会であった。日本女性会議が二〇回まで継続したのは、ひとえに名古屋市の実行委員の「志と情熱」のお蔭である。しかし、満艦飾とも言える大会はその後の女性会議を大きく規定し、第二回目の引き受け手がなく、担当者が各都市を行脚したと聞く(第一分科会・高橋ますみ氏談)。一、三回目を担当された川崎市の方々の苦勞が偲ばれる。

その後の開催都市を眺めると、いわゆる「地方都市」であることに気付く。これは時代の風のなかで、「国策化」した女性政策が、地方都市に浸透する過程と言えるだろうか。さらに女性会議は本来の目的だけでなく、各都市の特色や観光振興を盛り込む「地方都市の祝祭」の性格を帯びるようになり、「地方都市&住民の元氣」を示すものとなったことが伺える。

また、二〇回の女性会議は各テーマに象徴されるよ

日本女性会議20年のあゆみ（開催年/開催都市/大会テーマ/概要と特色）

◎第1回（1984年）名古屋「語り合い 考え合い」

国連婦人の10年の最終年を目前に、「女性差別撤廃条約」の批准を目指し、基調講演、シンポ、10の分科会、加藤登紀子コンサート等を79団体で開催。2日間で延べ9700人が参加。スタートにふさわしく規模、エネルギー共に最大。実行委員長は名古屋市長、副委員長：大脇雅子氏ほか。全体の報告書と共に10分科会の報告書も作成。

◎第2回（1985年）川崎「かわさき女性フォーラム85」

この年、ナイロビで開催された「国連婦人の10年最終年世界会議（第3回世界女性会議）」のテーマ、「平等・発展・平和」の実現をめざし、基調講演、5つの分科会のほかナイロビNGOフォーラム報告などを34団体で開催。2回目以後、実行委員長は団体の長などから選出。

◎第3回（1986年）川崎「かわさき女性フォーラム86」

第3回も同じく川崎市で開催。川崎市の友好都市のリエカ（ユーゴスラビア）、ボルチモア（アメリカ）、瀋陽市（中国）から6名の女性を迎えて、各国の女性の現状や課題について講演と討論を67団体で開催。「国際平和年」にちなんだ国際的な会議。

◎第4回（1987年）山形「あなたの生き方 みえていますか」

パネルディスカッションとスラローム、5つの分科会などを開催。主催は17団体。個人参加の実行委員あり。

◎第5回（1988年）北九州「21世紀の世界をひらく女性たち WOMEN PREVIEW 21」

日本文学研究者ドナルドキーン氏の基調講演とシンポ、4つのトークセッション、国際女流映画祭などを45団体で開催。

◎第6回（1989年）那覇「女性が創造する平和」

世界の女性の平和と平等をテーマに基調講演とシンポ、5つの分科会などを開催。中国福州市からゲストを迎え、42団体で開催。

◎第7回（1990年）高松「快速に動き 快速に生きる」

快速生活をテーマに基調講演とシンポジウム、4つのセッションなどを開催。第7回大会では50人の実行委員が個人参加で主催。

◎第8回（1991年）藤沢「かがやけ地球、女と男で—共生・活力・創造を求めて—」

池子弾薬庫の問題を契機に、地球環境と生き方をテーマに据えて、基調講演、シンポ、4つのセッションなどを実行委員52名で開催。参加者2000名。

◎第9回（1992年）長野「豊かに拓こう地球時代—男女共生のあしたをめざして—」

地球環境と男女共生をテーマに、基調講演、シンポ、4つの分科会などを64団体で開催。「男女共同参画による豊かな社会の実現」という指針が示されたは当大会から。

◎第10回（1993年）福岡「風は西から いま、行動のとき」

第10回の記念大会。女性会議では初めての模擬国会形式で、シンポと4つのセッションなどを40団体で開催。セッションでは大臣役と議員役の意見発表、全国の有権者が活動事例報告。

◎第11回（1994年）和歌山「時代（とき）を翔（かけ）るひとたちへ」

女性の活躍をテーマに、基調講演とシンポ、4つのセッションなどを33団体で開催。

◎第12回（1995年）新潟「ともにつくる社会ひろがれ ウイメンズパワー」

世界女性会議・北京NGOフォーラムの熱気を受けて、鼎談、創作劇、7つの分科会などを203名の実行委員で開催。分科会では世界女性会議の報告、セクシャリティーが新テーマに登場。

◎第13回（1996年）宇都宮市「さあ 世界へ ともに歩だそう」

元イギリス首相のサッチャー氏による記念講演、シンポジウム、8つの分科会などを125団体で開催。分科会ではマスメディア、行政が新テーマに登場。

◎第14回（1997年）岡山「自分らしく生きられる社会に！」

自分らしくをテーマに、基調講演、シンポ、8つの分科会、女性たちの手づくりミュージカルなどを、119名の実行委員で開催。この頃から一般公募の実行委員方式が定着。

◎第15回（1998年）尼崎市「＜個＞と＜個＞で紡ごう共生社会」

震災3年後の厳しい状況の中で、共生社会をテーマに、基調講演、わいわいトーク、12の分科会、分科会報告などを67名の実行委員と200名余の協力スタッフで開催。分科会ではDV、防災、まちづくりなどのテーマが新登場。実行委員長は大会中唯一の男性。

◎第16回（1999年）浜松市「21世紀へのプレリュード 奏でよう自分らしく」

ハーモニーとシンフォニーをキーワードに、基調講演、全体会、8つの分科会などを125名の実行委員で開催。カラフルな大会グッズが印象的。

◎第17回（2000年）津市「そうや！ 女も男もおんなじ人間やんか」

20世紀から21世紀への橋渡しの年を記念して、2つの基調講演、全体会、10の分科会、7つのワークショップなどを160名の実行委員で開催。参加者は4000名。ローカル色豊かなテーマと共に、日本国憲法の「男女平等」の条文を世界各国の言語で表現したスカーフが好評。

◎第18回（2001年）水戸市「世紀を拓（ひら）こう あなたと借（とも）に」

水戸市男女平等参画基本条例の施行の日に、2つの基調講演、記念講演、トークセッション、12の分科会などを240名の実行委員で開催。参加者は3300名。沢地久枝氏の講演が好評。

◎第19回（2002年）青森市「私は私を大切に思うのと同じ重さで あなたを大切に思う」

全国男女共同参画宣言都府県宣言の冒頭の一節をテーマに、記念講演、2つの全体会、10の分科会と3つのワークショップなどを205名の実行委員で開催。手作りの舞台装置が好評。

◎第20回（2003年）大津市「いのちの世紀びわ湖で輝け 女（ひと）と男（ひと）」

第20回日本女性会議を記念して、基調講演、記念講演、シンポ、12の分科会、湖上セッション、2つの展示を226名の実行委員で開催。参加者3500名。第1分科会&展示の資料に「写真と年表でたどる戦後の女性のあゆみ」、「日本女性会議20年のあゆみ」を作成。20回の女性会議関連資料を一堂に集め展示、市民と行政のパートナーシップの分科会も開催。

※日本女性会議すべての基調講演、シンポジウム、全体会、分科会等のテーマ、講師等については「日本女性会議2003おまつ」の報告書巻末にまとめた。

うに、いずれも時代の課題に向き合い、時代に影響されてきたが、女性問題の全分野にわたる取り組みが定着したのは第一二回の新潟市からであろう。第二回以後はそれぞれの都市の実情に即して四〇五程度だった分科会が七〇以上に増大し、第一回目の女性会議のパワーが蘇ったかのように見える。その背景には北京で開催された世界女性会議の余波があり、新潟大会は女性会議の「中興」的な存在と言えようか。しかしながら、この頃から女性会議は専門家のアドバイスを受けイベント化し、形骸化への道を歩き出したようにも見える。バブルははじけたのに、バブリーな大会を「ともかくにも開催する」ことに心血を注ぐ行政と実行委員の苦渋が見え隠れするのである。これは実は、大津大会の実感そのものであった。

さらに、第一四回の岡山市からは一般市民の公募による実行委員方式が定着し、団体主体から市民主体の女性会議に発展したかに見えるが、その実態はどうだろうか。むしろ、国や自治体の法制度や女性施策の整備に反比例して草の根の自主活動団体が減少し、女性団体だけでは担い切れない状況が生まれた結果のように思える。個人原理による市民参加が時代の趨勢になったことも背景にある。期間限定の大イベントの場合、

個人参加方式は、団体の長からのトップダウンが可能な団体参加方式に比べ、組織の運営効率が悪いのは確かである。つまり女性会議は、時代の流れの中で団体参加から市民参加を余儀なくされ、「団体と行政のパートナーシップ」から「市民と行政のパートナーシップ」へ試行錯誤を重ねながら転換してきたと言えよう。

第一回・名古屋市が提起した根源的な課題

女性会議は第一回の名古屋市以来、自治体首長の決定（誘致）により開催されてきた。自治体が多額の費用を拠出する以上、行政主導（行政が責任を持つこと）は当然のことであり、さらに実行委員会方式を採用以上、対等で民主的な運営が問われるのは当然である。

第一回の名古屋市では女性会議に関わる多くの課題が提起されたが、特にこの「市民と行政のパートナーシップ」（女性運動は行政とどう関わるか）について、激しい議論だけでなく、女性会議参加への反対運動が起こつたと聞く（同・高橋ますみ氏）。

雑誌「あごら」の中にその論議を伝える貴重な記録が残る。一九八四年一〇月発行の「日本女性会議⁸⁴なごやに参加して」は、名古屋大会の副委員長を務めた

大脇雅子氏の執筆であり、翌年一月発行の「女性運動と行政―日本女性会議84なごや不参加の立場から」の論文は、反対運動の理論的指導者・水田珠枝氏の執筆である。

大脇氏の論点を要約すると、①地方自治の次元では、住民が審議会・公聴会・地方自治体主催の会議等々に関わり、要求を反映させる作業が必要。②地方都市が全国大会を開催することには、「地方都市の分際で生意気」と国の機関から横やりが入り、また、いくつかの女性団体からも「女性会議は行政主導だから参加すべきでない」と批判を受けた。③しかし、問われるべきは、女性会議がすべての住民に開かれ、(民主的な)意思形成を可能にしていたかどうかである。④女性団体は自主的な運動の中で力量を貯え連帯を続けなければならぬが、上位下達の中では、住民運動と行政との関わりは今後も苦しい決断を迫られるだろう、というものであった。

一方、水田氏の論点は、①女性会議の構想は行政によるもので、オリンピック誘致に失敗した穴埋めである。②行政の組織原理と女性(市民)団体の原理は基本的に異なり、両者が合体すれば、女性団体は専門知識を有する行政職員に容易に管理され操作される。個

人が主体的に関わる審議会などには参加してもよいが、行政主導の非民主的運営の女性会議には参加すべきではない。③女性団体は自主性を確保するために、行政から補助金などを受け取ってはならない、というものである。

さて、両者の主張は、時代の背景(ソ連やベルリンの壁、五五年体制などの崩壊前の時代)を抜きには語れないものの、市民と行政のパートナーシップに関わる根源的、今日的な課題を鋭く提起している。その後の女性会議でも陰に陽に噴出した問題ではないだろうか(天津大会でもしかりである)。ただ、二〇年という歳月を経て、市民のポジションは「反体制」から「地方自治への市民参加」にパラダイムの変換がなされつつあり、それゆえ筆者は水田氏の傍観的な立場、そしてその底にある「エリート意識と市民蔑視」、「行政への奇妙な幻想」には共感しがたい面がある。助成金についても同様で、NPO法の成立は市民活動の大きな成果である。なによりも「助成は女性のためにある」(第一分科会・上野千鶴子氏談)のだから。

その点では、女性会議を主体的に担い、苦勞した者同士として、大脇氏の苦惱に満ちた主張により共感を覚える。実行委員が「行政のシステム」の中に縛られ

ながら活動することの難しさ、そしてあまりに手間暇
かかり無駄が多い運営など、二〇年経っても根本が変
わらないことに悄然とする思いがある。

いずれにしても、名古屋市中で提起された課題は、女
性会議だけでなくあらゆる市民活動で今後も問われ続
ける根源的な課題ではなからうか。スタートの名古屋
市でこのような真摯な論議が活発になされたこと、そ
して『あごら』紙上にその論議が残されたことに深い
尊敬の念を抱く。だからこそ女性会議が二〇年続いた
のだと思う。

大津大会の実感から

「市民と行政のパートナーシップ」を考える

前述のように、女性会議の開催は自治体の首長の決
定によるが、大半の開催都市は国体と同様、「廻って
きたので仕方なく」というのが実情ではなからうか。

大津市は環境や福祉関係（介護保険等）では行政と
市民のパートナーシップの蓄積があるが、女性会議の
ような大掛かりの行事、それも行政と市民が長丁場と
向き合い、創り出す行事は共に初体験のことである。
大津大会の過程はまさしく「市民と行政のパートナー

シップ」の実験場、血の滲む試行錯誤の中で実現した
貴重な催しだったと言えよう。

さて、大津大会の反省会の折、心に残る言葉を聞いた。
女性会議準備会を共に担ったある委員の言葉であ
る。「ほんまにえらい目にあつたなあ。私らのやったこ
との六割が無駄だったと思う。他都市は行政がもつと
しっかりしてたとんと連うやろか」というもの。筆者は、
「どこも似たり寄ったりではないか」と答えたものの、
内心では大いに共感した。少なくとも三、四割は無駄
な作業だったように思う。まず、膨大な「紙」の浪費、
延々と続く会議と山のような作業、費やした膨大な時
間。また、それに伴う経費の自己負担などなど。

多くの市民がもつと気軽にゆつたり参加でき、スムー
ズに動く運営システムは築けないものだろうか。これは
大津大会の大きな反省点、そして今後の男女共同参画
と全分野のパートナーシップの重要な課題だと思ふ。

以下、大津大会の反省点と課題を、市民と行政のパ
ートナーシップの問題にしぼって列挙してみる。

①女性会議の誘致には、まず行政の志（熱意）と庁内全体
の合意形成（環境整備）が必要。

②市民参加には事前準備とプログラム整理が必要。

・一般公募の実行委員会は千差万別の市民が初めて出会う

場であり、種々の困難が予測される。半年程度は事前オリエンテーションを行ない、女性会議の共通理解やリーダー養成が必要。また、実行委員が五つの部会（総務・全体・渉外・広報・分科会）への所属を決定するための準備期間、環境づくりも必要。

・大規模な女性会議の行事は、是非はにおいて、アドバイザーやNPOを含むプロ集団の参画が不可欠である（映像配信等のプロデュースを初め素人では対応できない業務が多数）。スタート時点で行政・市民・アドバイザー・プロ集団等々、それぞれの役割分担や委託業務等について、時間軸でプログラムを組むことが必要。

③実行委員会の組織運営には行政システムとは別のシステムが必要。

・実行委員会の組織・運営形態を、煩雑な行政のシステム・慣習に従わせるのではなく、スタート時点で作成した実行委員会の運営システムを徹底させることが必要。特に、会議の度に度々作成する書類や、業務執行段階での煩雑な書類の簡素化、また入札等を行政の指定業者制度ではなく実行委員会独自のシステムが必要。

④実行委員会のスムーズな運営と実行委員の業務軽減を図ることが重要

・実行委員会は、部会ごとに内容を検討し決議機関の企画

運営会議に提案するが、時間をかけて検討した結果が否決されることが多々ある。行政による最終段階でのチェックも多く、部会ごとの検討過程・進行段階での適切なアドバイスが必要。また、事務局（行政）の作業分担によって、実行委員の業務を軽減することが最重要課題である。

⑤新しい器に新しい酒をそそぐ、市民参加システムと人材登用が重要。

・女性会議は男女共同参画社会実現に向けての人材育成と、新しく出会った人々が男女共同参画のネットワークを広げる場。女性会議の成果を活かし、新しいメンバーが参画できるシステムづくりと環境整備が重要課題である。

波乱万丈のはて、大津大会で得たもの

実行委員会は結成したその日から各部会に分かれて討議を開始したが、見ず知らずの他人どうしが準備なし小手調べなしの大混戦。とにかく一年目は、五つの部会と企画運営会議で喧々囂々の議論が沸騰した。

分科会部会ではまず、分科会テーマを決めるためのワークショップを開催した。出揃った二〇〇近くのテーマを五〇前後に絞り、最終的には一五の枠組でスタートしたが、「したいテーマから、すべきテーマへ」

の転換は難しく、テーマごとに担当者数にばらつきがあり、少数の分科会は最後まで苦労することになった。

こうして決定したテーマと内容、講師候補等を二〇〇二年の師走、公開プレゼンテーションを実施し、実行委員全員から意見を求めた。ここまですが本場の「生みの苦しみ」。プレゼンテーションの成功で自信を深めたメンバーは、その後、数回の公開学習会や各テーマごとの会合、予算編成のための会場調査や必要備品のピックアップ、総勢六一名の講師交渉や資料作成等を自主的に展開した。

大会前の一週間は寝る暇がないほどの忙しさで、大会当日は目が廻る忙しさ。それだけに全国三五〇〇名の参加者から寄せられた大きな評価の声は、実感が伴わず茫然とする心地であった。改めて参加者の皆さまの温かいご声援、ご協力に感謝したい。

大会準備の最中に、報告書作成のためのマニュアルを分科会部会独自に作成したことも付記しておきたい。年度内に報告書が刊行されたのはこのような事前準備のためであった。

天津大会の実行委員は艱難辛苦に立ち向かい、本当によくがんばったと思う。実行委員は知らず知らずのうちに実務能力を身につけ、自信と信頼と友情、大き

なネットワークを育んだ。これが最大の成果だと思う。

実行委員会が解散しても別れがたい想いを抱くメンバーは、分科会有志会やフレンズ会を立ち上げ、新たな目標に向かって新しい取り組みを開始しつつあることも触れておきたい。

また、実行委員会では女性会議の成果を今後につなげるために「男女共同参画社会の早期実現に向けて」の要望書を天津市に提出した。その要点は、①男女共同参画宣言都市としての先進的位置付けの確立、②天津市男女共同参画プラン「おおつかがやきプラン」の早期実現に向けた活動拠点の整備、③天津らしい施策推進のための研究会設置、④既成団体ではなく新しい事業に対して助成する「チャレンジ支援事業」の創設、⑤メモリアルデーの設置、などである。要望書の最後は、「実行委員一人ひとりが財源確保と経費節減に務め余剰金を出したことで、この余剰金を可能な限り男女共同参画社会の早期実現のために活用してもらえよう切に願います」と結ばれている。

余剰金でチャレンジ支援のための基金を創設することとは、分科会部会が必死で提案した要望、行政との最後の攻防であった。実現は叶わなかったものの、新しい活動へ希望をつなげたことは確かである。

江口凡太郎

北海道滝上高等学校

卒業まで残りわずかのホームルーム。卒業生代表の「答辞」を決めます。どよんとして、決まらない。

C「みんなでやろ」

凡「いいね！それだ！みんなでやろ！史上初全員答辞！会議に出してみろ」

と言うわけで、前代未聞の卒業生全員答辞に決定。二五人という少数だからこそできること。答辞用のつづら折りの長い紙を一人一人に切り分けて、そこに各自の想いを簡潔に書いてもらいました。それでも、つなげると長いこと！でも、それぞ

れに高校生活の思い出や、将来の夢を語る内容になりました。

さて、前回も登場S君もギリギリでしたが無事に卒業決定。全員答辞最後にSが、深々と礼をして読み上げました。「自分はこの三年間で、沢山の事を学んだ。滝上高校に来るまでは、何かをやり通すなんて事は一度もなかった。中学の時親が何十回も学校に呼ばれ、そのたび泣かせ、不安にし、心配させたけど、やり直しをかけるために高校に入りました。でも、勉強、規則、授業どれも自分にはとても辛かった。正直何度も辞めようと思った。けれどそんな中でも応援してくれた仲間達や先生方には感謝しています。本当にどうもありがとうございました。」

中学校から三ヶ月持たないと言われた生徒です。三年間は一人の人間を大きく成長させるのに十分な時間であると実感します。そして、そういうステキな時期を一緒に過ごせた

ことは、私にも最高の幸せです。

さて、江口も涙と感動の卒業式のはずなのですが、なぜか本番で、呼名で一人とばしそうになるというミスを！その瞬間クラス全員が担任の方をバツと向いて目で鋭く合図。「あっ」式場に響く江口の焦り声、どうもかっこよきは決まらない。そして、涙も出ませんでした。

子ども達は、最後のホームルーム全員で歌を歌ってくれました。このために日曜日に全員集まって練習したというのですから驚きました。歌も最高によかった。子ども達は「泣けー」と言いましたが、涙は出ませんでした。

これも、「男」に育ってきたからか？ そう言えば、最初に卒業生を出した時も同じでした。準備期間から続く緊張状態が解けず、涙が出ないのだと思います。々終わる々という実感がわかないというのもあります。感性が鈍化したのでしょうか？

「家事労働」について考えよう

— その3 女性は昔から主婦だった？ —

藤井 徳子

(県立工業高校 家庭科)

高校生に理解してほしい
アンペイド・ワーク

世界の労働時間の三分の二を担い、食物の二分の一を生産し、賃金は一〇分の一でしかない労働…これが世界の女性達が担っている労働、つまりアンペイド・ワークです。一九八〇年にILO（国際労働機関）が発表したのですが、これほど生

産活動に貢献し、なおかつ社会に不可欠であるにも関わらず評価されないのはなぜでしょうか。

女性の地位向上と人権をめざしてさまざまな法律が施行されましたが、いまだに男女平等とはいえない現実が存在します。この大きな要因として、やはりアンペイド・ワークにおける男女の性別によるアンバランスが影響していることは事実でしょう。

そのために国連は北京会議においてアンペイド・ワークの貨幣的評価を打ち出したのです。

女性は主婦であり家事労働を担う…わたしたちはそう考えがちですが、実際は違います。職業をもち、家に帰れば家事労働という二重の労働を背負うことがほとんどですし、農家など第一次産業を営んでいる方にとっては家業を担っているのです。

男性の賃金労働を優位とする意識、家事労働を女性が行うのは当たり前という意識、けれど実は女性の家事労働がなければ男性の市場労働はありえないこと、つまりこれまで女性が担うアンペイド・ワークは実は社会基盤であり産業の発展と進歩に大きく貢献していることを高校生に理解してほしい。

そして、このアンペイド・ワークを労働として社会的に認知されたものにしていくことの必要性を認識するとともに、女性の生き方は主婦だ

けではなかったことを彼らに知ってほしい。そんな思いで今日の授業を進めていきます。

女は昔から主婦だったのか？

そこで今日の切り口は、まず落合恵子さんの抱えていた疑問「女は昔から主婦だったか」という命題について考えるべく、その問いを彼らに投げかけることから始めます。

もちろん「当たり前でえ」「男が主婦な訳ないよな」「せんせ？何言いいよん？」とくっつくような答えが返ってきます。

そこで、「じゃ、主婦って言うのはどんな事をする人？ 主婦とはこういうものであるっていう定義を教えてください」と問いかけると、まず出てくる答えは「仕事しよらん人」「女の人」「家の中におる人」の三パターンです。「何の仕事？」と問い返すと、「外の仕事をしよらん女の人」と返っ

てきます。

実はどのクラスも最初の問いではここまでしか出てこないのです。高校生の目には家事労働さえも「仕事」とは映っていないようです（まるで第二次主婦論争…）。

そこで、「外に働きに出ていないで、家にいるなら、家の中で何してるの？」と尋ねると、「昼寝しよる」「真珠婦人」（注1）見よる」…。

「はいはいわかったよ。じゃ、みんなが今はいてるそのパンツ、自分で洗ったん？ 一時間目が終わったら早弁するお弁当は自分で作ったわけ？」と、なかばあきれたふりをしながら突っ込むと、彼らはやつと「飯、洗濯、掃除」と授業に戻ってきます。

「じゃね、まとめるよ。みんなが考える『主婦の定義』は女性で、外で仕事をせず家で炊事・洗濯・掃除をする人ってことでいい？」と言うと、まだ「いや待てよ。『真珠婦人』

は使用人がいて家事はしてないぞ。ということは『真珠婦人』は主婦ちがうんか？」と、「真珠婦人」からぬけられない生徒がいるのも事実…。

「じゃ、もとの質問に戻ります。女は昔から主婦だったか？」

「召使いが家事をして自分がせんかったら違うんかな」…どうやらまだ『真珠婦人』に思いをはせている様子です。

なぜ彼らの中で『真珠婦人』がブームなのかは分かりませんが、使用人を持つことが当たり前だった時代（大正期）から、「主婦の誕生」を考える上でとてもおもしろいので押さえておきます。

主婦の誕生

そこでアン・オークレーの『主婦の誕生』（三省堂、一九八六）を見せながら、内容を紹介してゆきます。

オークレーは「主婦の役割の特徴」

として、①もつばら女性に割り振られる②経済的な依存③労働として認知されていない④女にとってそれが主たる役割であるという四点をあげています。この指摘はいまでも納得できますよね。

二章には、多様であった女性の社会的な位置付けが工業化とともに「女性＝主婦」という一つの形になってゆくことが指摘されています。ここは「性別役割分業」の授業の核心となる部分なので、簡単に概略を話しておきます。

そして序文を紹介します。「筆者自身が、主婦として抑圧を経験したことについて家族に感謝しなければならぬ。それがなければ、そもそもこの本を書きたいという気持ちこそそれられることもなかったわけだから」

ねえ、どういうことだかわかる？ この研究をしようとするにいたったモチベーション。約五〇年も前に生

きていた女性も現代の女性も同じ抑圧と闘ってたんだね。こう付け加えて初めて男の子は「主婦が抑圧されている？」ことに気づくのです。

支払われない労働の問題点を生活の中から実感する

では、日本の場合について考えてみます。

落合恵美子氏は「主婦が大衆化して多数派になるのは第二次大戦後の高度成長期」であり、「中流階級のみに限った場合は主婦の成立は大正時代の第一次大戦後」だと指摘しています。

そして中流階級の家庭には「女中」という家事使用人が雇われていたことも指摘しています。生徒があれほど気に掛けていた『真珠婦人』もまさに主婦なんですね。ただ、大正時代の主婦と第二次大戦後の主婦の違いは、使用人の存在だけでなく価値

観の違いもあったことも事実のようです。

戦後、主婦は家にいて家事・育児をするものだという価値観が優位となったために（この経緯については次の授業で説明）、職業をもった女性、商家や農家の女性はとも肩身の狭い思いをしなくてはならなくなったのです。

けれど女性の生き方は主婦だけでなく、たくさんあったことを強く認識して欲しいと考え、こんな風に生徒に投げかけます。

「みんなが生まれる六〇年くらい前を想像してみよう。おじいちゃんやおばあちゃんが生まれたころだよ（本校の親年齢は平均四〇代なので）。日本は農耕民族って言われているよ。だから農家を例にするよ。家が農家だとしたら、田んぼで働くのは男性だけ？」

そう尋ねると、彼らは妙にエキサイトします。それは本校が自然に恵

まれた町にあるがゆえに農業や漁業を家業とする家に生まれた生徒が多いからです（ちなみに名産はサツマイモ、梨、れんこん、わかめ、鯛など）。

「収穫の時は家族総出じゃ。わいら子どもまでこき使うんぞ」（都合のいいときだけ子どもをふりを使います）

「ワカメはな、海から引き上げるの、すごい重いんぞ。それを海岸に干すのが中腰できついなんのって；バイトには一日八〇〇〇円渡すのに、わいには手伝うのが当たり前って金くれん」（まさにアンペイド・ワークですね）

彼らは口ぐちにアンペイド・ワークの問題点を指摘してくれます。

そこで、かつては家庭の中で生産と消費が行われていたのが、戦後の高度経済成長により産業構造が変化したこと、そのなかで女性が家事労働を担う主婦という役割へと追いや

られたこと、そして「女は主婦であるべき」だという規範が大衆化したことなどをまとめておきます。

「でもな、先生、家事やせんないんちゃうん？ だってコンビニが弁当作ってくれとるでえ」

なんていい質問でしょう。しかも自分のためにコンビニに弁当があるような言い方。

そこで「そうだよな。コンビニにはお弁当があるし、掃除代行サービスだって、買い物代行サービスだってもう当たり前だよな。じゃあ、みんなはコンビニでおにぎり買うときお金を支払うよね。商品と貨幣を交換する。これが市場経済だよ。じゃ、家で食べる食事にお金払ってる？ クリーニングに出したらお金払うのに、家で洗ってくれたらお金払ってるの？」

もちろん答えはNOです。しつこいほど繰り返して彼らに確認している

ことは、家事労働は無償労働であることです。市場においてそのサービスは対価を支払うものであるにも関わらず、支払われない労働；それが家事労働なのです。

「市場経済……？」とわかったような、わかかってないような、どうも反応が今ひとつの彼らです。でも、市場経済……労働の再生産……そして、性別役割分業の歴史……については、次の授業でメインとするので、このへんで「よし……」としておくことにします。

「主婦」が戦後に誕生したことへの驚き

市場で必要な労働力の再生産を市場外、つまりは家庭で行うことにより経済はより発展します。そして女性には家庭へと活動を狭められ「私的」な「再生産」労働を賃金不払いで担うことになるのです。しかも男性優

位の社会を正当化するべく女性が無償で家事労働を行うのは、家族への「愛情」があるからであるなどというイデオロギーがつくられることで、女性は家事労働を担わざるを得ない状況となってしまう。家族のために尽くすことこそが美德であるかのようになり家事労働を位置づけることで、もし家事労働を合理化しようものなら、周りからだけでなく、自分自身をも女性たちは罰し続けてきたのです。

家業に従事する：聞こえはいいですが、給料などは一切無く、自由になるお金も時間も女性にはありませんでした。確かに彼らの定義は間違いではありません。家から離れ外に勤めに出て働くわけではないのですから……

でもここで押さえておきたいことは、女性が担うのが当然とされた家事労働は産業構造の変化に伴ったものであり、「主婦」は昔からいたわけ

ではないということなのです。

日本では戦後の産業化により「主婦」が誕生したのです。不思議ですね。「戦後、女性は強くなった」と言われる中で、実は女性の生き方を狭めた「主婦」が戦後に誕生したのですから。

この事実は生徒にとつてかなりな驚きだったようです。彼ら曰く、「そうなんか。でも、そうやな、一〇〇年前はちゃんまげ結って刀さしとつたんやもんな」

そうなのです。確かに、そして日々歴史はつくりられています。

わたしたちが当たり前として全く疑おうともしない常識や価値観。それを鵜呑みにするのではなく、本当に正しいんだらうかと吟味する能力、それは私が生徒たちに身につけて欲しいと願っている力である批判的思考力の育成の一步につながったように思えます。

そしてこの一つの発見が次の発見

へとつながればいい、と心から願っています。

農村女性の状況と

「家族経営協定」

北京会議においては、農業に関する女性のアンペイド・ワークが大きく取り上げられました。「開発」の分野においては女性のエンパワーが叫ばれています。

≪ Banker to the Poor ≫として貧困地域の女性にお金を貸し出すという人間中心型の開発を行っているムハマド・ユヌス氏のグラミン銀行（注2）の取り組みを話してみました。生徒の反応は今ひとつで首をかしげるばかり……

豊かな国に生まれてきた彼らは「貧困」という言葉は知っていても、実際の現状までは見えないのです。でも地球市民として大切なことですから、別の機会にしっかりと考えて

もらうことにして、もっと彼らに身近な話を取り上げます。

それは農家を営む生徒の母親との会話が始まりでした。

もともと農業を営んでいるその家は、家族で全ての農作業を行っているのですが、生徒の父親は外に働きの出たのです。もちろん農繁期は家族総出で作業を行います。普段、父親は勤めに出ているため、母親が中心となって農作業を行っています。なのに税金を申告するのは一家の長である父親（夫）であり、主に農作業を行っている自分（妻）には何の権利も報酬も無く、本人曰く「私には一銭の稼ぎもない」のだそうです。

女性の労働に対する画期的な農業施策が少しずつ浸透し始めているのをご存じでしょうか？

それは「家族経営協定」です。先述したように、税制上「一農家につき経営の主宰者は一人」とされるだ

けでなく、農地の権利名義を持つ女性にはほとんどいないために、農業に従事する女性は年金加入もできませんでした。それが「家族経営協定」を結ぶことで、女性は経営者である夫と同等の立場で農業経営に参画し、年金にも加入できるようになります。さらに、収益の分配や経営の分担、就業条件などを明確に書面に盛り込むことで、世帯員が対等な立場で共同経営の関係を確立することができます。

よく「農家の嫁にだけはなりたくない」とささやかれていましたが、この取り組みが普及すれば、女性の地位向上だけでなく、意欲や生きがいもつくられるでしょう。まさに男女共同参画社会にふさわしい取り組みであり、授業で紹介しています。

ここはやはり実物見本です。実際の「家族経営協定書」にどんな事項が盛り込まれているのかを知っても

らうために拡大コピーして見せながら、それぞれの部分を説明していきます。

「第一条には、この協定書の目的が書かれてるよ」と言って、生徒にはわかりにくい「甲、乙、丙」に具体的に名前を入れながら説明します。

「例えばね、甲をみんなのお父さんとすれば、乙はお母さん。丙がその後継者であるみんなの名前を書き込むの。みんながもし結婚したなら、その妻となる女性も丁として書き込むんだよ。こうすれば、いわゆる農家の嫁っじやなくて、対等な立場である共同経営者となるんだ。」

「へ？」と生徒。

「第四条には、収益分配について書かれてる。収益を毎月何日に各個人名義の口座に振り込むものとするって。つまりは経営に参画した全ての人が、自分の労働に対する報酬を受け取ることができるわけ。」

「と言うことは、親父から金もら

うんじやないわけやな」「なんかいいかも…」とまずまずは彼らに好評です。

そこで「第五条では、就業条件を決めます。一日の労働時間は○時間を原則とする。休日は月何回、でも健康状態や他の仕事の状況をふまえて協議する…みたいな感じで、この協定書はそれぞれの家族で話し合っ
て決めるんだよ」

休みになると自分の都合などおかま
いなしに(?)畑や海へと駆り出
されていた生徒にとっては、「これは
大事じゃ。わいらやって予定がある
んやけんな」「一日何時間って決まっ
とったら、まだ許せるわ?」と感心
することしきり。

「そうだよね、こうして協定書に
記すことで仕事に従事する人たちの
意識が変わると思うよ。特に、これ
まで経営の表側には決して出ること
のできなかつた女性にとつては、自
分が経営してるんだってという意識が

生まれて、より意欲的に取り組むこ
とができるし生きがいだって生まれ
るよ。

それにク農家の嫁クがなんで敬遠
されたかっていうと、長時間労働で
休みなし、給料なしつてのが当たり
前だったじゃない。それが共同経営
者で自分の労働に見合った報酬をも
らえるつて協定を結んでもらえたら、
何の不安もないと思うよ。でもさあ、
これつて当たり前前の権利なんじやな
いの?」

あらためて生徒に問いかけます。
「うん確かにそうやな」
全ての生徒がうなずきました。

近い未来に農家を継ぐことになる
彼らがこうした取り組みを知ってい
れば、まさに性別に関わりなくパー
トナーシップの関係を確立すること
ができますよね。また農業だけにと
どまることなく、家族で会社を経営
する場合にだつて参考になるはずで

す。

とっても地道ではありますが、男
女共同参画社会への大きな一歩でも
あります。この取り組みがもつと全
国的に普及するよう、みなさんも授
業で是非取り上げてみてください
(各都道府県の農業課で資料をいた
だけます)。

私にとつての

男女共同参画社会への道

性別に関わりなく男女が対等に生
きていく社会、男女共同参画社会の
実現は、まず「家庭」…つまり家事
労働から取り組むことが大切ですよ
ね。

地方の一教員である私にできるこ
とがあるとすれば、それは二一世紀
を担う彼ら(男の子)の意識改革だ
と考えています。それが私にとつて
の男女共同参画社会への道ですし、
今回の改革で学習指導要領に唯一

「男女共同参画社会」という文言が明記された家庭科が担わなければならないことなのかもしれません(?)。

女性学と男性学はまさに表裏一体ですよね。

オークレーは「今すぐ女性にできること」として極めて現実的な指摘(メッセージ)をわたしたちに示してくれています。

それは「主婦」ラベルの拒否、娘が主婦にならずにすむ方法、息子には家事のやり方を示すこと、家事ができれば女性としての本性にもとるといふ強い規範に逆らうことです。

学校では何かと家庭科教員が便利(6)に使われます。梶原さんの指摘、「家庭科教員は学校の主婦的役割を担わされている」という指摘には私も同感です。来賓のリボン作って、女子生徒を指導して、式典の布にアイロンかけて…などなど、他教科の女

性教員には一言も声を掛けないのに…です。

まあ、誰かがやらなきゃと、こまごまと走り回るわけですが、教員の意識改革の取り組みは横において(時間がかかりそうだから…)、とりあえず工業高校の家庭科教員である私にできることは…男子生徒の意識改革でしょうか。

オークレーがアドバイス(?)してくれたいように、男子生徒に自律(自律)する意識とともに、家事のやり方をしっかりと教えておくことにします。

ベストセラーとなった大江健三郎著「自分の木の下で」(朝日新聞社、2001)の中の言葉を引用すると…
upstanding、まっすぐ一人立つことができるように…です。

【引用文献】
アン・オークレー「主婦の誕生」(三省堂、1986)

落合恵美子「21世紀家族へ」(有斐閣、1994)

(注1) 菊地寛原作の昼メロ

(注2) ムハマド・ユヌス氏のグラミン銀行の取り組みは『ムハマド・ユヌス 自伝』貧困なき世界をめざす銀行家』(1998 早川書房)に詳しい。

※グラミン銀行のホームページ(英語)
<http://www.grameen.com>

※授業ですぐに使えるワークノート(B4版)を一〇〇枚所収した教材集をつくりました。新学習指導要領に対応した二単位のテーマ学習で、キーワードは「人の一生」「エンパワーメント」「ジェンダー」などです。印刷代実費+送料二五〇〇円でお分けてできます。

※連絡先

T E L : 090-7142-3113

E-mail: fujii888@at7.mopera.ne.jp

「覚醒」と「自立」のための「ジェンダー論」

女子大での教育経験から

第6回 ピルを飲まずにHをするな!

沼崎 一郎

(東北大学教員)

暴力についての授業に続いて私
 が取り組むのは、実用的な性教育で
 ある。最初は、避妊の知識だ。なに
 しろ熱愛至上主義に駆られて情熱的
 な恋を夢見る学生たちは、「愛して
 いるなら、お互いに激しく相手を求
 め合うはずだ」と信じているから、
 何の備えもなしに、「求められるま

まに応じて」しまつては、性病をう
 つされたり、望まない妊娠をしてし
 まうということになりかねない。
 「今日は本当のテストだからね」
 と言って私が配るプリントは、その
 名も「避妊知識実力テスト」である。
 「ハーティ仙台」の八幡悦子さんが
 作ったもので、○×式の問題が二五

ほど並んでいる。問題文は、「月経
 中はセックスしても絶対妊娠しな
 い」、「一五歳以下の男の子には、ま
 だ妊娠させる能力がない」、「オギノ
 式の避妊とはヶ月経の前後1週間は
 安全日々というもの」、「膣外射精
 (外出し) は、手軽で確実な避妊方
 法なので、男のコはぜひマスターし
 ておきたい」、「コンドームは射精の
 直前につければよい」といったもの
 だ。要するに、よくある誤解を集め
 ている。

学生たちが書き終えた頃を見計
 らって、「○はいいくつありました
 か?」と聞く。例によって、前後左
 右の友人同士ワイワイガヤガヤと
 騒々しくなる。そこに私のマイクが
 響く。「正解は全部×です! 一つ
 でも○を付けた人は、Hをしてはい
 けません!」
 ますます騒々しくなるなかで、
 私はビデオの準備を始める。性と健

康を考える女性専門家の会・企画、株式会社イオス・製作の『ビデオシリーズ避妊』という一〇分間のビデオである。排卵と受精のメカニズムや女性ホルモンの作用を説明し、妊娠を防ぐピルの働きを丁寧に説明した上で、セーフセックスのためにはピルによる避妊とコンドームによる性病予防という「ダブルメソッド」が必要であることを訴える内容になっている。どちらかというと、ピルの確実性と安全性を強調している。また、コンドームの不確実性を示す統計を見せて、コンドームに頼りがちな日本人の避妊法の問題点を指摘している。ビデオのあとに、私の今日の一言が続く。「ピルを飲まずにHをするな！」

とにかく映像で見せなければ、今時の学生たちにはインパクトはない。だから、一〇分ほどの簡潔なピル紹介ビデオは、実に貴重である。

また、他の避妊法に比べて確実に安全であることを強調している点も重要である。なぜなら、ピルについては迷信と誤解ばかりが流布されているからだ。ピルは怖いというイメージだけが蔓延しているのである。ピルについて書かれた本やパンフレットにしても、客観性を装うために、効果の説明と副作用の説明が同じくらいの長さで書かれていることが多い。しかし、もともとピルに対して偏見を持つている人は、そのような「客観的」な説明を見ると、副作用のことがばかりが目について、結局やっぱりピルは怖いという印象を強めてしまう。そういうわけで、ピルの良さを強調したビデオを見せるくらいでちょうどよいのである。そうであれば、ピルに関する迷信と誤解を打破することはできない。

私も、ピルに副作用がないとは言わない。体質によっては合わない

人もいるし、病気の時には使えない場合もあることは説明する。そのうえで、次のように問いかける。「ピルを飲むことで、軽い頭痛のような副作用があったとしましょう。では、ピルを飲まないことの副作用は何でしょうか？ それは望まない妊娠です。頭痛が嫌で、妊娠の危険を冒しますか？ それとも、妊娠しないために、多少の頭痛は我慢しますか？ もちろん、Hをしないと選ぶもあるけれど、いずれにしても、あなたたちが決めなければいけないことですよ。自分で決めるんですよ、自分の身体の問題なんだから。」「今は妊娠したら困る、子どもは産めない、だけどHはしたい。それならば、自分の身体を守るためには、一番確実な避妊法を使わなければいけないでしょう。それは、今のところピルです。ピルなら一〇〇パーセント近く避妊できます。日本では、外国のよ

うに簡単に入手できる制度になっていないけれど、産婦人科で診察を受けて処方してもらうことができません。保険は使えないので、初診料が一万円から数万円、そして毎月の薬代が三〇〇〇円から五〇〇〇円かかります。でも、それで妊娠の心配がなくなるんだから、高くはないでしょう。診察料と薬代は、彼に半分出させなさい。妊娠させない責任は、彼にもあるんだから。薬飲む手間がない分、彼には余計払わせてもいいかもしれないね。そういう話を、きちんと彼としなさい。そして、ちゃんと避妊を考えてからHをしなさい。そういう話ができないような彼なら、別れなさい！」

ビデオのなかにも少し出てくるが、モーニング・アフター・ピル（緊急避妊薬・七十二時間以内に服用すれば妊娠を防げる）の話は必ずするようにしている。避妊しない性交の

強要は実に頻繁に行われていることが、学生たちの感想に溢れているからだ。もちろん、深刻なレイプ事件も少なくない。緊急事態の際には、とにかく産婦人科に駆け込むこと、それも性暴力問題やリプロダクティブ・ヘルス・ライツに取り組んでいる産婦人科がいいことを強調する。後で刑事告発する際など、産婦人科医の診断、それもレイプを証明してくれるようなきちんとした診断は欠かせない。常日頃から、そういう産婦人科を知っておくようにと強調する。仙台市内の産婦人科医については、「おすすめ」の病院名を告げる。

リプロダクティブ・ヘルス・ライツなどというカタカナ語は、彼女たちの耳には入りにくい。頭に残ることもない。だから、私は昔懐かしいリブの標語を使っている。「産む産まないは女が決める。それは女性の権利なの。だから、避妊するかし

ないかは、あなたたち女性が、自分ひとりで決めていいの。自分で決めなければいけないの。男の言いなりは絶対ダメ！」「そもそも、日するかしないかも、自分で決めていいんだからね。それも女性の権利なんだからね。嫌なら拒否していいんだよ！」

学生たちの感想を読むと、しばしば愕然とする。次のような感想が、珍しくないのだ。「今日の授業はためになりました。先週は妊娠してしまった友達と二人だったのですが、一週間で一人増え、三人になりました。身近に多すぎて驚きです。きっと、三人ともきちんとした知識がなかったんだろうなと思います。自分もピルに関しての知識がなく、漠然と怖いものというように思っていたのですが、ビデオを見て考えが一変しました。」中には、マシな感想もある。「妊娠するということ、避妊

ちょっと反省してみましょう

1. あなたが毎日していることに○をつけなさい。

歯磨き 洗顔 朝シャン プロー メイク 食事 入浴
ほかに、あなたが毎日していることを、思いっただけ書きなさい

()

2. あなたのお金の使い方を考えてみましょう。

①あなたは、1回のコンパ(飲み会、パーティ)にいくらくらい使いますか? _____ 円

②あなたは、月に何度くらいコンパ(飲み会、パーティ)に行きますか? _____ 円

①() × ②() × 12 = _____ 円

③あなたは、口紅を何本持っていますか? _____ 本

④あなたの口紅は、1本いくらくらいですか? _____ 円

③() × ④() = _____ 円

⑤あなたが一番最近買った服の値段はいくらですか? _____ 円

⑥あなたは、毎年何着くらい新しい服を買いますか? _____ 着

⑤() × ⑥() = _____ 円

3. もしも、毎日1粒ずつ飲んだら確実にダイエットできる薬が、毎月3,000円で買えたら、

買う 買わない

それでは聞きます:

ビルを毎日飲むのは面倒くさいでしょうか? YES NO

ビルの値段は高いと思いますか? YES NO

4. 以下の質問に答えてください。

A. スリル満点の楽しいジェットコースターがあります。安全ベルトは無く、5人に1人は振り落とされます。あなたは、このジェットコースターに

乗る 乗らない

B. もうひとつのジェットコースターは安全ベルトが付いていますが、それでも10人に1人は振り落とされます。あなたは、このジェットコースターに

乗る 乗らない

C. そのほうが快感だから、一緒に安全ベルトをはずしてジェットコースターに乗ってくれと彼に言われたら、あなたは、安全ベルトを

はずす はずさない

それでは聞きます: 【注1】

膈外射精(外出し)では、5人に1人以上が妊娠しています。それでも、あなたは避妊具を何も使わずにセックスをしますか? YES NO

コンドーム使用者の10人に1人以上が妊娠しています。それでも、あなたはコンドームだけでセックスをしますか? YES NO

彼に「ナマがいい」と言われたら、言うことを聞きますか? YES NO

もしもあなたが、膈外射精(外出し)やコンドームに頼ってセックスしているなら、安全装置のないジェットコースターに平気で乗るほどの大バカ者です。

もしもあなたが、彼の言いなりに避妊しないセックスに応じていたら、彼に言われて安全ベルトをはずしてジェットコースターに乗るほどの大バカ者です。

「かけがえがない」のは自分のカラダとココロです。かけがえのない自分を大切にしてください。男などいくらでも「かけがえはある」! 決して言いなりになるではない!!!

するとということ、自分の知識のなさに改めて気づきました。付き合っていれば性的な関係になるのは自然なことだと思えます。ただそうなったからにはお互い責任を持たなければならぬのだと強く思いました。女である以上、リスクを背負うわけで、それを自分がきちんとしていれば防げるのならば、そうしなければならぬと思います。『ピル』という高額なイメージがあつて手が出せませんが、今日の講義で見方が変わりました！」

しかし、大多数の学生の反応は困つたものである。「やっぱり薬は怖い」とか、「三〇〇〇円なんて高過ぎる」とか、「毎日飲むなんて面倒くさい」という声が圧倒的に多いのだ。それで、翌週の授業の最初に、またまた私はプリントを配布することになる。その名も「ちょっと反省してみましよう」。内容は、ご覧の

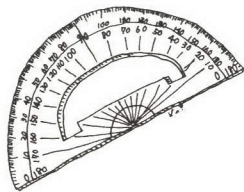
通り。ここまで言わなければ分からないのかと呆れるかもしれないが、ここまで言わなければならぬのである。それが、大学生の現実なのだ。

【注1】教室で見せたビデオでは、ある調査によると、コンドームを使用していたと回答した女性のうち望まない妊娠をした女性が一四%もあつたという結果が示されているので、コンドームは使い方によっては、十人に一人以上の割合で避妊に失敗する危険があることを訴えるために、こういう設問を入れている。

コンドームの避妊成功率は九八%以上であるという調査もあり、高等学校の保健体育の時間にこの数字を習つたという学生もいる。しかし、正確な調査は不可能だし、たとえ失敗率が二%以下だとしても、一〇〇人に一人以上は避妊に失敗していることになるので、二〇〇人近い学生を前にして、「たとえコンドームの失敗率が一%くらいでも、この教室の中で一人や二人は望まない妊娠をする危険があるんだよ。それは自分か

もしれないんだよ。」と強調することになっている。確実な避妊と性感染症予防には、ピルとコンドームの併用が不可欠なのだというメッセージを、なんとか学生たちに届けたいからだ。

※ご質問・ご批判を歓迎します。
numazaki@saltohoku.ac.jp まづ電子メールでお寄せください。



□曲がり角の家庭科「番外編」

「食」を通じた福祉コミュニティ
「ひまわり」訪問記

梶原公子

(元公立高校家庭科教員・大学院生)



左から 入江さん、梶原

「ひまわり」って何

「ひまわり」については、すでに本誌一月号「食の歳時記」に入江一恵さん自らが紹介している。「ひまわり」が、昨年一〇月三〇日にオープンしたこと、NPO法人のコミュニティビジネスであり、入江さんがその中心人物であるらしいというこ

とはわかった。でも、いまいちその実態というか全体像がつかめなかった。いったいどのような場所か、どのような人たちが、どのようなビジネスを展開しているのだろうか。そして入江さんはどのように活躍しているのだろうか。昨年末以来、一度訪問しなければという一種の使命感（誰にも頼まれていない）と好奇心、あとはヒマとに誘われて、去る二月

五日「ひまわり」を訪問したのだった。

大阪からJR新快速で明石に向かう。神戸あたりでみぞれだったのが、三宮あたりから雪に変わる。明石よりも一つ大阪寄りの駅、朝霧で下車。「来たバスのどれでもいいから乗って、明舞センターで降りるのよ」という入江さんの指示通り明舞センターで下車し、「ひまわり」に電話する。バスを降りた反対側の通りに、「ひまわり」のある明舞センターというショッピングセンターはあった。

入江さんはそこから出て来て、道路越しに手を振った。「バス道路をはさんでこちら側が明石市、ショッピングセンターがあるほうが神戸市なのよ」と説明しながら、「ひまわり」にと案内してくれた。

「ひまわり」のあるショッピングセンターは二階建てで、その上は一階建ての住宅が重なっている。上

下それぞれ一〇軒ほどの商店が軒を並べている…と聞いたところだが、四分の一ほどの店はシャッターを下ろしている。

この付近一帯は明舞団地と言っており、高度経済成長長期に兵庫県が開発した大規模団地で、ピーク時の一九七〇年代には三万五千人が住んでいたという。それが高齢化に伴って世帯人員も減少し、いまは二万六千人台に減少、空家も多くなり、商店街も店じまいしたのだ。高齢化率は二三%だという。そこで、兵庫県は団地再生とコミュニティの活性化を考え、団地の空き店舗を活用したNPO事業支援を行うことにしたのだ。その事業の一つとして開業したのが、入江さんが代表である「ひまわり」なのである。

さて、入江さんに案内された「ひまわり」は、シヨッピングセンターの一階の一番奥にあった。「ひまわり」と書かれた明るい色調の看板が

掲げられている。お店の前と入り口には「NPO法人ひょうご農業クラブ」が育てた有機野菜、イモ類、豆類、卵などが並べてある。店内はまず、ダイニングテーブル三つ、カウンター、一七人分のイスが置かれたレストラン部分がある。白い壁紙と黄色いテーブルクロスが店内を明るくしている。その奥は配膳室と食器収納部分。そしてその奥が厨房だ。総面積四九平方メートル弱。元バイクシヨップを改装したのである。着いた時はすでに昼の二時。すっかり食事が終わっていて、店内ではこの日のイベントである、折り紙でお雛様を作る作業が始まりつつあった。この日の昼は盛況だったということで、予定の四〇食はほぼ完売で、辛うじて残る一食をこちそうになった。

メニューは日本食の一汁三菜が基本。この日（二月五日）のメニューは、鰻の南蛮漬・野菜炒め（鰻、青

葱、たかのつめ、たけのこ、きぬさや、にんじん、きくらげ）、ふろふき大根（大根、八丁みそ、ごま）、白あえ（春菊、ほうれん草、豆腐、にんじん、こんにゃく、椎茸）、みそ汁（なめこ、わかめ、青葱）。食材の切り方や味付けなどの扱い一つひとつについていねいに工夫が凝らされている。

隣のテーブルには、東京オリンピックで活躍したというカメラマンをリタイアされた方とそのお連れ合いとが食事をしていた。この店の常連さんだと言う。

食後のコーヒーを飲んで、ようやく周囲を見回すゆとりができた。

「ひまわり」の三大特色

さて、「ひまわり」は、他のレストランには見られないいくつかの特色がある。

もっとも大きな特色は、単なるレ

ストランではなく、いくつかの機能を併せ持った複合的な「居場所」を提供していることで、今風に言うなら「福祉コミュニティ」であるということだ。レストランとして食事を提供する、お弁当として昼食を高齢者の自宅に宅配する、有機野菜を販売する、お店を開放して高齢者対象にさまざまなイベントをするという活動がある。それらを通して、明舞地区の高齢者の交流と活性化、地域再生の一翼を担うという機能を果たしている点だ。

したがって二つ目の特色は、この事業は営利目的ではなく、非営利事業であり、「ひまわり」で働く人はボランティアであることだ。現在男性数名を含む、二七人ほどの人がボランティアとして登録している。ボランティアの働きかた、働く時間はその人のもつとも都合の良いやり方を選ぶことができる。店が開店するのは月、火、木、金だが、すべての

日に勤務してもいいし、いくつかの日だけに限定してもいい。また、報酬もその人のさまざまな状況によって異なるという。ちなみに、責任者である入江さんは全ての日に勤務するが、無報酬を選んでいるという。

三つ目として、レストランで出す料理は、スローフード、ヘルシー、セーフティなどさまざまなポリシーが盛り込まれている点だ。多分これらのこだわりやポリシーは入江さんのこれまでの人生が集約された結晶ともいえるべきものだと思う。その中でもっとも驚いたのは、開店以来三ヶ月以上たつのに、一度として同じメニューの日はないということだ。見せてくださった二二月の献立には「手作り飛竜頭ブロッコリー添え」「豆腐の茶きんむし」「長芋の揚げ団子きのこあんかけ」などなど、どのようにつくるのか、でも食べてみたいと思うメニューが並ぶ。入江さんは、「前日の夜になつてから、翌日

の献立を考えたりするのよ」と言うが、これだけのレパートリーは、とても一夜漬けでできる代物ではない。

この三つの特色から見えてくるコンセプトとは、高齢社会でのコミュニティ再生の媒介として「食べる」と「食」を採用し、具体的で顔の見える身近な付き合いを構築していこうという姿勢だ。ここには「食」を通して、一つの理念を実行している姿が映し出されている。

「ひまわり」の抱える問題

もちろん「ひまわり」もいいとこづくめではない。お話を伺っているうちに、いくつかの悩みや問題を抱えていることがわかってきた。

一つには、「ひまわり」の目ざすポリシーを受け入れ、ここにやってくる人たちというのは、何らかの形で「食」にこだわりを持つ人、一定

の知識や教養、経済力のある人たちになってしまい、そこから漏れた人たちにどう対応していくのか、という問題がある。それにまだまだ口コミに頼っていて広報宣伝活動の不足もあり、広く地域に浸透することが難しいという点だ。昼食のみ提供するレストランで、一食五五〇円、週四日として二二〇〇円。それが負担になる方も少なくない。

ふたつ目は資金不足。県から二年間にわたり合計二〇〇万円の助成金がつく。そして人件費は極端に押さえてある。テーブルやイス、食器類は寄付や持ち寄り。厨房の機器と室内の改装は新たにお金をかけた。しかし、このレストランを運営していくための資金としてはいかにも少ない。県の助成金の金額の〇があともう一つ欲しいと思う。

三つ目はお店のロケーション。明舞センターの中で最も奥で、目立たない場所にある。そのうえ店舗内に

トイレがないから、店舗の外の寒いトイレを利用しなければならぬ。

実は、「ひまわり」には私だけでなく、二二歳の娘と彼女の友達の人で訪れたのだった。帰りの道すがら、二人に感想を求めた。

「とにかく、感動した。高齢者の方があんなに生き生きとお店を運営しているのを見て、あのような世界があるんだと、とても視野が広がった。遠かったけど、来てよかった。入江さんがとても元気で、七〇過ぎには見えない」と娘の友達。

いまの若者は、社会の実態から隔離されたような大学と、アルバイトの世界しか知らない。「ひまわり」は彼女たちにとって一種のカルチャーショックだったのかも。

「ヒまわり」にいた老夫婦の方で、お孫さんがここに来たいんだけど、土、日は休んでこれないと言っていたね。お孫さんだけでなく、高校生や大学生、あと働いている人

もこられるように、土曜か日曜のどちらかでも開店すればいいのにと考えた。お年寄りだけの世界になっちゃうのがちよつと残念」と娘。

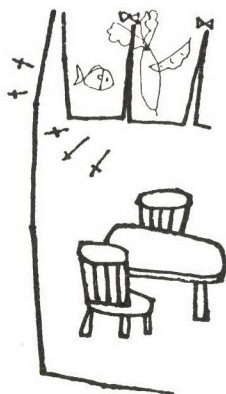
確かにその向きはある。若者もこの世界を知りたがっているし、ここから得るものはきつと大きいに違いない。もしかしたら、彼らの将来にかかわる重要なヒントを「ひまわり」のようなコミュニティから吸収するかもしれない。そうなれば「ひまわり」が開店した意味はとても大きいと言えるだろう。

※「ひまわり」の日常をつづった入江一恵さんの新連載は40ページです。



「ひまわり」の日々

入江一恵

【第一回】
私のおみず物語

一九四六年春、私は四国高松から上阪して焼野原に点在するバラックの前に茫然と立っていた。十六歳の少女には、当時の大阪は過酷過ぎた。でも敗戦の代償として自由を得たと心底思い、未来に何かすばらしいものが待ち受けているようにも思っていた。何ヶ月かたった或る日、友人と難波で映画を見た帰り、地下鉄の入り口で「手相」のあかりを見つけ、なんとということなく手を差し出した。占い師は、「あなたは水商売に向いていますよ」と簡単に言っただけだ。「えっ！そんな、私は、家

政理学を専攻している学生ですよ」と返すと「家政も理学も水と関係があるでしょう」とうまく逃げられた。ク粹々とおよそ縁のないイモねえちゃんが何で水商売できるのよと、私は下宿に帰るまでブンブンしていたのを今でも鮮明に覚えている。

そして六十年近い時空を経た昨年十月、まさに水商売なる「ふれあい食事処」をたちあげた（このことはすでに本誌一月号に掲載）。ちなみに広辞苑をひもとくと、水商売とは「客の人氣によつてたつていく収入の不確かな商売の総称」とある。四ヶ月経った今まさに不確かな日々の連続である。「完売御礼」の張り紙が続くかと思うと、次の日はドスンと落ち込む。

お雛様の特別献立は大張り切りで五十食用意した。押し寿司にぬた（わけぎといかの辛子酢味噌）お吸い物は、ゆば、生麩に菜の花、それに前夜こてば（白餡をつくる豆）を煮て、こし餡を夜半までかかつて作り、淡いピンクに染め、ゆで卵の卵黄のうらごしをめしべにしたて、ゼリーで固めた桃の花ならぬ椿の花に見立てた和菓子もついているというシロモノである。

三十五食でとまり、残りの十五食を前に溜息。でもボランティアは、そんな時歓声をあげる。テイクアウトできるからである。「入江さんは、最近おみずにはまっている」とは或るスタッフの言葉。緊張した瞬間から突き

落とされるまでのスリリングな時を私自身楽しんでいるのかも知れない。

いくらかの客観的な情報の分析によって、不確かな客数を、或る程度確かなものに変えられる筈である。曜日、天候、近くの高齢者大学やクラブの開講日などである。利用者は会員制でもない、配食以外は予約制でもない。そんな事業形態であるが、お客様の心を掴む洞察力がもっと私にあればと思う。

そもそもこの事業は、兵庫県が明舞団地再生とコミュニティの活性化を目的としたモデル事業で、これに応募したNPO法人ひょうご農業クラブの「食」を通じた福祉コミュニティづくりの連携事業として「ひまわり会」をたちあげたのである。提携農家から出荷された減農薬、無農薬の野菜、米を販売する部門と、こうした野菜と地域の明石の魚を使つての食事提供が、私の仕事である。私はオープンにあたつて私たちの願いとして

忘れられた旬と季節

ほんものの味を取り戻す

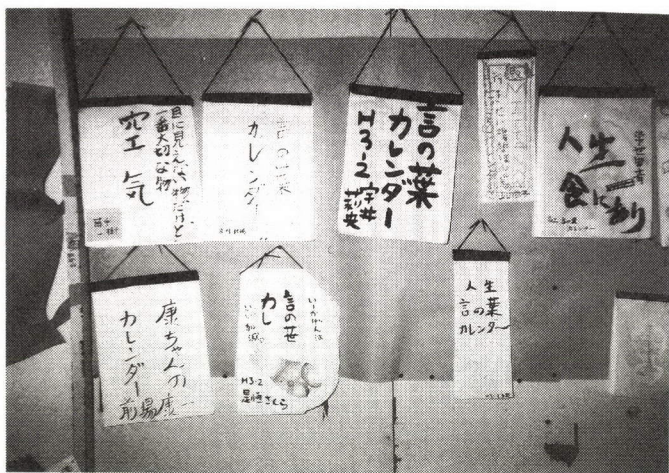
「食のひろば」

を訴えた。十一月は週二回、十二月は週三回、一月から月、火、木、金の週四回営業、配食、ミニデイサービスも始めた。利用者は口コミによって確実に固定化の方向に向かつている。

先週、ラジオ関西の取材があり、今週の月から金まで放送された。その日はお客様でごった返していた。グループでこられた元気な高齢女性たち、ひまわりの食事が気に入っている女子学生、十年前につれあいに先立たれ、自炊をしているおじいちゃんの加門さんは、外食が大嫌い、ひまわりの食事は好きだと言われる。彼はレポーターの質問に「ひまわりはわたしの命の泉です」と答えた。私はラジオの前でうなつた。多少文学的表現が加味されているかもしれないが、日頃寡黙な加門さんの言葉だけにずっしり、胸にこたえた。一食に二十種類は下らない食材を使い、昔懐かしい味の再現を心がけただけに嬉しかった。

立ち上げの初期の頃、或る老人から「あんだ、誰のためにこんなことやってるのや」と尋ねられ、虚をつかれた思いで、一瞬答えに窮した。「明舞に住むお年寄りのために」とか歯切れの悪い答えをしたが、今はこれを撤回しよう。「協働」は利用者から私たちへの働きがあつてこそ成り立つもの、私は大変なエネルギーを費やし、体力の限界に挑戦している毎日であるが、それにかえられない胸のときめき、ふくらみをこの人たちからもらっている。風邪ひとつひかなかつたこの冬ももうすぐ終わりを告げ、春はそこまでやってきている。

(文・いりえ・かずえ/イラスト・加藤由美子)



ちんな授業でした。

放課後、出席日数が足りない生徒のための補習授業でも、「家庭科の日めくりカレンダーはさあ、なんか課題って気がしなくて、ちょっと息抜きて感じて、これだけはマジ楽しんでやれるよ〜」なーんて言ってくれるほど、こちらも好評でした。

作品は、2月の末に「学べた会」（学習発表会）で、高3全クラス分を、2つの教室を使って展示したのですが、多くの生徒、父母、教員の方々に見てもらうことが出来ました。

他教科の教員方からは、「うーん、これって家庭科なの？性とか家族とかジェンダーとか、もっと他にやることあるんじゃないの？」と酷評も頂いたのですが、僕は内心、（これこそ家庭科じゃん）と思っているのです。

「何かね、書いててすっきりしたよ。うっすらだけど、出来るかどうかわかんないけど、自分が何を大事にしていきたいか、ちょっと見えて来た気がする」

「冗談っぽい作品の中にも、その人その人の今やこれからが見え隠れしていて、面白かった。クールに見える人が、意外とあつい人だったりして……」という生徒たちのコメントからも読みとれるように、「言葉の葉カレンダー」に限らず、テーマが家族であれ、性であれ、食であれ、素材（教材）を媒介に、クラスの生徒たち一人一人の、大切にしているもの、感性、考え方を、共有しあう＜場＞が家庭科の時間であり、そうした＜場＞をコーディネートするのが、家庭科教師の役割なんじゃないかと思うんだけどなあ。

カトーさんの授業スケッチ

“言の葉カレンダー”の巻

加藤昭仁

私立中・高校家庭科教員



「はっきりさせなくてもいい。あやふやなままでいい」

お〜っ。

「誰かと争うのではなく想いを伝えたいだけ」

あーっこれもわかるなあ。

「何事も完成する事はない。失敗の仕方が個性」

スゲー。

「ケチな秀才よりバカな素直で」

うーんこれって〇〇っぽいなあ。

*

*

昨年度、高3の授業（「人生をデザインする」）のまとめの課題は、教科の人たちのアイデアから生まれた、言の葉カレンダー（1週間、または1ヶ月分の、日めくりカレンダー）を作ってもらうことにしました。

最初は、「えーっ習字がよ〜。やりたくねえ〜」「そんないくつも言葉なんて浮かばねえ〜よ」と言っていた生徒たち。でも筆と墨汁、半紙を渡すと、いつもはザワザワしている教室が、この時ばかりは水を打ったように静かになりました。

当初、ちゃんとやってくれるか心配していた、いつも斜めに構えた男子生徒やヤンキー系の面々も、（あれっ、今日は珍しくマジメな顔して、やってんじゃん）

僕はといえば、時々生徒たちから、「カトーさん紙が足んなくなった〜」「墨もっとちょーだい」と声が掛かるまでは、座ってるだけで何もしなくていい（？）ラク

木村栄

連載「女が歳をとるといふこと」
81

気ままな人

駅ビルのブティックで服を物色した。好みは決まっているが、時には殻を破ってみたくなる。趣味のいい色柄物に冒険心をそそられて袖を通してみた。悪くない。だが、気慣れないものは何かと気になる。

これ、オバサンぽくないかと、

一番心配な点を店員に聞いてみた。

「着る人によつては、ね。お客さんなら大丈夫、お洒落ですよ」

じゃあ、どんな人が着るとオバサンぽくなるの？

「ま、奥さんかな」



ということとは……。ねえ、私、何してる人に見える？

女性店員は、あつさりと答えた。

「そっねえ、気ままに暮らしている人……」

なるほど。「主人」持ちには見えないし、子どもの世話に追われる歳でもない。定年間近のOLでもなさそうだし、責任ある地位にあつて重責をこなしている者の威厳も貫禄も緊張感もない。

私はよく生活感がないと言われるが、つまりはそういうことだろうか。

生活感を感じさせないと言えば、かつては、所帯やつれや糠味噌臭さを感じさせないさわやかなイメージを表現する言葉だった。ついさつきまで糠味噌を掻き回しているようが、見切り品のセールに血眼になっていようが、そんな気配は毛筋ほども見せない見事な「女つぶり」への賞賛と言っている。

だが、今は違う。テレビドラマの登場人物に生活感がないといえ、何をして食べているのか、暮らし向きはどうかといった生活の実態が見えず、リアリティを欠くという不評だ。

私の場合、もちろん後者に違いない。

頭でっかちで世間知らず、「箸より重いものは持ったことがない」ような華奢な手と、パンプスをはける骨格ではないとシューフィッターに憫笑された小足。そのくせ「女らしく」もなくぼんぼんモノを言うとなれば、確かに「気ままに生きている人」としか言いようがないだろう。

さすが接客のプロ。よく見ているなあと感心半分、私だって人並みの苦労はしてるんだと歯ぎしり半分、でもやっぱり根無し草のコンプレックスをばっちりと刺激されて、以来、一度も店に足を向けたことはない。

わがまま映評 11 「幸せになるためのイタリア語講座」 満田康子

国の歴史的・文化的・経済的そして地理的条件を知っていると知らないのでは、映画の楽しみ方が数倍違うといわれる。この映画の場合、北欧の人々の南欧への憧れ——太陽の国・芸術の都、恋と食の国イタリア、そして美しい水の都ベネチア——を知っていれば、『幸せになるためのイタリア語講座』のタイトルにこめられた意図がよく理解できるだろう。そして「マセラッティ」が、イタリアの有名な自動車の名前であることを知っている、主役の一人である神父がマセラッティを売ったという一言で、彼がこの地デンマークに住むことを決意したことがわかる。このあたりの仕掛けを見逃すと、「どうしてイタリア語なのさ？」なんだっていいんでしょ。要するに、生活にダレたオジサンオバサンが、いい年して自分探しのためにカルチャーに行つて、適当な人とくっつく単純な話じゃん」というような評がされかねない映画である。

デンマークのコペンハーゲンの郊外。なにかしら不都合があつても冴えない人生を送る人々。

偏屈で寝たきりの父を介護し何十回と転職して、今はパン屋の店員。愛妻に先立たれ、失意に沈む神父。痴呆の母の介護に疲れ果てている美容師。孤児院育ちで、元サッカーの選手だが、短気で粗暴なためリストラされる雇われ店長。その彼を何かと庇う人の良いホテルマンは実は性的不能に悩んでいる。その彼に思いを寄せているが、言葉の壁のために気持ちを抱えられない若く美しいイタリア人のメイド。この六人がもつれあうこともなく三組のカップルを作っていく。

彼らのうちの五人が転機を求めて、夜間に開催されているイタリア語初級講座で出会う。一回目の授業で講師が急死してしまい、講座は閉鎖されそうになるが、メンバーの奔走で、元サッカー選手が臨時講師となる（ややご都合主義な展開だが）。授業を進めているうちに、内容がサッカーの話になってしまうのがおかしい。神父の教会で葬儀が重なり、パン屋の売り子と美容師は幼いときに別々に父と母に引き取られた姉妹だったことがわかる。妹が自分の電話番号を姉にメモするが、その字の大きさ、幼稚さに驚かされる。これは、妹が胎内にいるとき母親がアルコール依存症だった後遺症で軽度の障害があり、それが、仕事に失敗しては首になる理由なのだとわかる。そんな母を抱えて来た姉の苦しみも一瞬でわかる。このあたり上手に伏線がきいている。

この三組のカップル、一人を除いては、みんなスタイルも崩れ気味だし輝いているとは言い難い。それぞれに重荷を背負っていて、不器用だが、前向き（ありふれた表現だが、中年になって新しい語学を習うのを前向きといわずにいられようか）な姿勢が自然体で描かれていて好感が持てる。神父の妻、姉妹の父母など、この映画では次々と人が死んでいくが、それだけに残された人々の健気に生きているさまが愛おしく思われる。

中年のロマンチック・メルヘンなんて本当に珍しい。捨てがたい映画である。

（ロス・シエルフイグ監督・2000年・デンマーク）

板橋区の社会教育館主催の絵画教室でキミ子方式の市民向けの講座を作ってくれた。基礎四つの講座だったが、その後、参加した人の中から有志が集まってサークル活動として、毎月一回ボクを呼んで講座をしている。

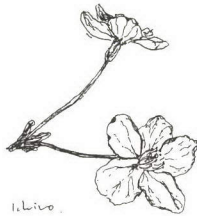
もう八年位続いているだろうか。会長さんは八〇代の男性で、最近では耳が多少不自由になっているが、余計なことが耳に入らないおかげか自分のペースで着々と作品を仕上げていく。会のために部屋の予約を入れたり、会員に連絡を入れたりしてくれている六〇代の女性は、モデルの用意や日程の確認をボク宛てにメールで知らせてくれる。他にも、足が不自由だけど人一倍元気に手も良く動かすけど、口は手の倍くらい動かして陽気に参加してくれる六〇代の方。静かにいつも淡々と作品を仕上げ「今

過去を振り返らない／先を考えない【40】

「では、またあとで御寄りしますわ」

松本一郎

まつもといちろう／キミ子方式 講師
◎ご感想：ご意見おまちしています。
ichiro-m@ka2.so-net.ne.jp



日もうまくいきませぬ」というのが口癖の七〇代の女性。この頃は七〇代の男性も入会して、メンバーは一五人位、平均年齢七〇歳前半の会だ。

そのサークルを見学したいと、卒論の取材で大学生の女性が来ることになった。午前の講座が終わって、彼女と一緒に板橋のサークルが会場にしている社会教育館に近い、街道沿いのラーメン屋で昼食をとることにした。店はカウンターだけで、八人分の椅子がある。開き戸をあけると、目の前にカウンターに座った。

店主であろうおじさんは、ボクが入ったときには調理が終わってお客さんに出した後で、手持ちぶさたに腕を組んで立っていた。その左ではご夫婦で働いているのか奥さんであろう女性が、せわしなく野菜を分けたり、なにかを探す

ように動き回っていた。

ボクらの右手にはし字に曲がったカウンターの端に七〇代の初老の女性が食事をしてた。彼女は小さな手提げをごそごそして、探しモノをしようとしたが、しばらくすると調理をしているおじさんに、「エンピツかなにか、書けるものを貸して下さい」と声をかけた。おじさんは「何かなかったけ」と声をかけ、奥さんは近くにあったペンをその女性に渡した。

少しすると、その女性は「では、またあとで御寄りしますわ」と言っただけで、引き戸を開けて外に出て行った。

それまで忙しそうに動いていた奥さんが、一息入れるように背を伸ばし、「食い逃げかい？」と話しかけた。そう問われたおじさんは、少し遠くを見るように正面を見据

えたまま「ああ、そうだ」と答え、「フー」と一息ついて話し出した。

「この頃多いんだよね。食い逃げ。それもさつきみたいに普通のおばあちゃん。なんだろうね、まあ、ウチなんかは単価が安いからしょうがないと思うしかないよね。でもたまに悪質なのがあって、そういうのは警察に突き出すけどね。」

すると、「金払ってないんだから、客じゃないよ」と奥さんの合の手が入る。「追いかけてもね、『これからお金を取りに…』なんて言われたら、家まで着いていくわけには行かないしね。そんなんで気分悪くしてしまうがねいしね」とあきらめた様子。それでも話し始めた止まらないのか、年金の話から始まって、裕福そうな人ほどしれっとお金を払わないという店主の目利きの話（先ほどの女性も最初から少し変だと感じていた

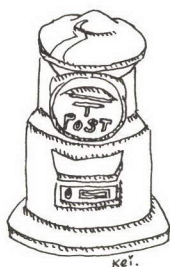
という）。それから「お金というものはそれだけで力を持っているから、多く集めたら少しは分けなければいけない。だからアメリカなんかの富豪は基金みたいなのに金を使って厄を落としているんだ」と、奥さんの合の手を支えられて夫婦漫才のような語りは続く。

ラーメンを食べ終えて勘定を払い、薄暗く曇った板橋の町に出た。会場までの道を歩きながら、見学に来ていた大学生の彼女がぼそっと「私、目の前で食い逃げする人を見るのは初めてです」と言うので、「自慢じゃないけど、ボクはもう四〇年くらい生きてきたけど、ボクだつて初めてだよ」と答えて、今から行く講座に参加してくれている人達と、食い逃げした初老の女性が同年配で、その違いってなんだろう…とフツと頭をかすめた。

みんなで楽しく政治をしよう！

鈴木めぐみ

浜松市市議会議員



1961年浜松市生まれ。射手座B型。大学卒業後、自動車販売会社の営業で活躍。その後子育てしながら、企画会社でイベント企画、情報誌発行に携わる。子どもの預けあいを通じて、母親たちのネットワークづくりに参加。女性、子育て、働く、まちづくりなどをテーマにした市民活動を通じて、当事者の声が市政に活かされていないと気付く。1999年4月、「ひとりひとりの声を市政に届けたい！」と立候補。女性たちを中心とする市民ネットワークの力で浜松市議会議員に当選。好きなもの／ビール、HAPPY。

◆ご意見、ご感想をお寄せ下さい。megu@megumi-happy.net

「どうして、政治家を志したのですか？」と聞かれると、未だにどう答えていいのか困ってしまう。子どもの頃から「政治は怖いもの、女性は関わるものではない」と言われ続け、政治は遠いもの、関係ないものと思ってきたし、ましてや議員は特別な人がなるもので、自分があるなんて想像することすらなかったからだ。

六年前、そんな私に、女性を議会へ送りだす活動をしているグループから次の選挙に挑戦しないかという打診があった。当時私は、企画・イベント会社で働きながら、子育てで支援や女性問題などの市民活動に関わり、その活動を通じて市民の声が届きにくい市政に疑問を感じ始めていた。「え？冗談でしょ」ととまどいつつも、政治から遠ざけられていた私たちだからこそ「自分らしいやり方でこれまでの政治に問題提起をしてみよう」「女性にとっても政治は楽しいことを証明しよう」と立候補を決意。イベントのノリそのまま選挙戦を楽しく戦い、同じように疑問を感じていた方たちの支持をいただいて当選。そして今、自分たちの生活は、市政と関係しているんだと発見した人たちと一緒に楽しく政治をしている。

さて、私のところに毎日のように持ち込まれる課題は本当に多種多様だ。一見単純そうに見える課題ほど、複雑にからみ合っていて、その解決策は行政の考えている事業や施策にあてはまらないことが多い。

例えば、来年小学校にあがる子どもの親から「通学路に危険な場所があり、心配だ」という相談が寄せられたでしょう。さて、このような課題の解決策はどこにあるのだろうか。「よし、私に任せて」と「子どもの安全を守るために歩道をつくるべきだと思うが、市長どうか」と議会で質問をし、それで立派な歩道ができたら、それで子どもの安全は確保できるだろうか。また、交通安全の黄色いワッペンを新入生の胸につけさせるとか、専門家を呼んで「子どもの安全シンポジウム」を開催するのはどうだろうか。無意味とは言わないが、それだけでは根本的な解決にはつながらない。

危険な場所と言っても、車の往来が多いなどの交通の面、変質者が出没するなどの防犯の面、大雨時に水かさが増すなどの防災の面など、多面的に課題を考える必要がある。さらに、通学路の問題は、学校、PTA、自治会その他、市の道路管理課、道路維持事務所、交通政策課、街路課、防災対策課、教育委員会（浜松市の場合）、そして警察なども関わっているのだ、どこにどう言っているものかわからず、結局ずっと危険な状態のままというケースは意外と多いのだ。

こんな時こそ、「みんなで楽しく政治」の出番だ。最近のあるケースでは、課題を持ち込んだ当事者のお母さんたちと、他の人たちはどう考えているのかを知るため、

まずアンケート調査を実施した。アンケート用紙を配ることによって、校区の保護者の方々と知り合いになり、通学の様子や学校の情報を聞くことができ、まず、この調査票配布という行動自体が、当事者である彼女たちを勇気づけた。このアンケートを集計、分析し、今後どう展開するかは、彼女たち次第である。自分たちでできることから実施するという自立的な活動により、解決策が見いだされる。私の役目はその活動をサポートし、今後どうしても、行政ではできないこと、あるいは制度を変えなくてはならないことになった時に初めて、私の「議員に与えられている力」を発揮したいと思っている。

「楽しく政治をする」ということは、行政や議員に任せにするのではなく、自分たち自身で暮らしや街の中にある課題を見つけ、それをどう解決していくか、その方向性を決め、自らも解決のために行動に移していくという主体的で楽しい作業だ。

そしてそのことが複雑にからみあった課題の根本的な解決策につながるのだ。

これから一年間、浜松でのドタバタの実践事例とそこから得たノウハウをレポートしていきたい。

新連載……仕事場の周辺から①……支えあいSOHOのハッピー度……石渡 秋

私もSOHOの端くれだ。SOHOとは、共存じとは思いますが、Small Office/Home Officeの略。小さな事務所や自宅を仕事場に行っているワーカーのことである。広義で言えば、サテライトオフィスやリゾートオフィスに勤務する、あるいは在宅勤務する大企業のテレワーカーも含まれるが、狭義では独立した小規模事業者、個人事業者、フリーの在宅ワーカーなどを指す。働く人だけでなく、ITを積極的に活用する自由な事業や労働形態も意味する。

SOHOなんて言葉が巷に登場していない時代から、編集プロダクションのSOHOを約二〇年、そしてここ一〇年はライターとして一人SOHOを細々と営んできて、SOHOキャリアだけは長い。が、私の場合、「スモールオフィス、ハッピーオフィス」をめざす呑気SOHOである。

バブルの最盛期に銀座のほずれにある古いマンションの一室を事務所として借りていたのだが、建物を建て直すので出て行ってほしいと言われた。同じくらいの家賃で近くを探したが、当時保証金も家賃も驚くほど高騰して、どの物件も手が届かない。「それならとりあえず解散しましょう」ということになった。メンバーのやりたい方向も若干違ってきて、その調整に手間がかかっていたし、通勤時間ももつたないと感じてきた。

自宅SOHOという選択肢もあったけれど、ちゃんと仕事する自信がない。そこで家から一〇キロほど離れたワンルームマンションを借りて、スクーターで通うことにした。一人SOHOになって、すぐくハッピーだった。話し合いや打ち合わせの時間がいらぬ。必死で仕事をとらなくても一人が

食べていけるだけでいい気楽さ。昼寝をしようと、旅行に何日かけようと、誰からもお咎めなしなのである。といっても、現実はいいいことばかりではないのだが…。

四、五年前に、都市基盤整備公団から、SOHO用の賃貸施設を建設する場合、どういふスペースだったか借りたかというアンケートが送られてきた。SOHOの一人としての意見を求められたのだ。へえー、公団もSOHO対応の建物をつくるのかとびっくり。

そんなことはすっかり忘れていたら、今年の二月になって、横浜市中区山下町に「SOHOSTATION」という施設が完成して入居募集を始めたという新聞記事を見た。いよいよ公団初のSOHO専用施設ができあがったのだ。約一〇〇〇〇平米のオフィスが五一室と在宅SOHO用の住宅四〇戸からなる一〇階建ての賃貸施設である。

SOHO支援では横浜のはるか先を行く三鷹市では、「SOHOCITYみたか構想」を掲げ、五年も前にSOHOパイロットオフィスを開設し、この四月にインキュベーション施設としてリニューアル・オープンするという。市の施設だけではなく、一般ビルをSOHO対応に転換するオーナー型SOHO施設も、どんどん増えているらしい。

時代は変わりつつある。あちこちで、本当に必要とされる小さなビジネスを、まちぐるみで大事に育てることが進められている。競いあいから支えあいのビジネスへのシフトである。

私とは言えば、二年前に、自宅から徒歩三分というマンションの三DKに事務所を移し、一人SOHOとなった夫とシェアしている。スペースは広くなり家賃の負担は軽くなったものの、家でも職場でも同じ顔を見なければならぬ、せつかく禁煙したのに迷惑な煙が流れてくるというデメリットも。満足度は現在六〇点と低い、ハッピーオフィスの実現をめざして、せつせと働いている。

(いしわたり・あき 企画・編集スタジオ「秋工房」代表、かながわNPO活動研究会「あむ」主宰)

私の好きな言葉

二見れい子

《 楽 ^{ラク} 》

今月から、気持ちも新たに新連載。なんだかんだ言いながら、やっぱり人は、好きなことをやっていると、考えているときに一番幸せよねえ、と、多くの人から見ればあたり前のことに最近感じ入っている。この連載も、ひと月に一度だけ、このスペースをお借りしてスタツフの皆さんを初め、いろんな読者の方々に会おう大事な場所。昨年一年間は、私の中のこだわり、というか、「……シダかなあ……」というもやもやを聞いてもらおう場として使わせてもらったが、今年はずっと「気」持ちよく行きたいと考えている。まあ、これはあくまでも年度始めの意気込みであって、そのうちまた皆さんに愚痴を聞いてもらうことになるかもしれないが……。とにかく少なくとも、今年好きなことに気持ちをフォーカスさせていくぞう!と思っている次第であります。

で、最初に思いついたのが「楽（ラク）V」という言葉。よく「楽に生きよう、楽なことしよう」



って言うと、ちょっと後ろめたかったり、気が引けたりすることって、私たち大人にはありますよね。これにちなんで、この間ちょっとおかしかったのが、ある曲の歌詞の解釈を巡る、我が家の小学生の息子との食い違い。

その歌詞とは、最近ヒットチャートを賑わせているヒップホップ・グループの「ミチシルベ」という曲の次のようなサビの部分。

いつのまにか忘れたのか？大人へと歩む道の中で

いつのまにか忘れたのか？楽しんで流れて身をまかせ人生

いつのまにか忘れたのか？大人へと歩む道の中で
光と闇をさまようけど 誰にも 胸には 道しるべ

息子はこの曲が大好きで、よく口ずさんでいる。私も今ではお気に入りの曲の一つなのだが、それは、若者たちが「ラクして流れて身をまかせる」自分の生き方を外側から眺めて、「これでいいんだろうか」と自らに問いかける、そんな真摯な姿にちょっと胸を打たれるから。ところがどっこい、そう思っしてみじみ聴いていたら、側で息子曰く「ウン、楽な人生ってのはいいよお。流れに身を任すっていうのは無理がなくてさ！」私、「えっ、ひよっとして、アンタ、楽な人生はいいことだ、サイコー、っていう意味だと思って聴いてる？」息子、「ウン、そうだよ、なんで？」私「……」

そうですか、そうか、そうか。私が「楽すること」をどこかで罪悪視して、小分けにいたたくものと思っ込んでいるのに対して、息子は「楽」を、そのまま素直に「ごちそうさまっ！」とたいらげてる。どっちの解釈が正しいかは別として、大人へと歩む道の中で妙にケチくさくなっている自分をちよっと反省させられたひとコマでした。

『インドの女性問題と

ジェンダー・サティ（寡婦殉死）
ダウリー問題・女兒問題』

マラ・セン著 鳥居千代香（訳）
明石書店、二〇〇四年二月
定価、二八〇〇円＋税

鳥居千代香

（帝京大学短期大学助教授）

本書は現代インドで最も重要な三つの問題に焦点をあてている。サティ、ダウリー問題、女兒問題（女兒人口がショッキングなほど減少している）についてである。

実際に起こった・起こっている事件への綿密な取材を通しインドの女性にかかわる最も重要なこれらの問

題の要因を浮き彫りにしている。

原著者はマラ・センで、彼女の本の翻訳は二冊目である。一冊目は『インド盗賊の女王』プーラン・デヴィの真実（一九八八）である。この原作（一九九二）を元に台本を書き、シェーカル・カプールが監督をした映画「バンディット・クイーン」（一九九四）（邦題「女盗賊プーラン」）でも有名だ。プーランの訳書を出す前からイギリスに住むマラ・センの自宅を何度か訪問し、私達はプーランに会ったときのことや、インドのことなどを話して合っていた。

プーランは「盗賊の女王」から一九八三年に投降し、一年間未決拘留された後、五七の犯罪を問われ、そのうち三七は殺人の罪を問われていたが一九九四年に仮釈放が認められた。一九九六年には社会党党首の薦めで下院に立候補、当選して国会議

員になっていたが、二〇〇一年七月に暗殺された。彼女の家に出入りしていた青年が銃を発射し逃亡したがその後記者会見を開き自分もプーランを殺し、出獄した後はプーランのように有名になり、「大政治家」になりたいと言って警察に自ら掴まった（彼は今年二月一七日に刑務所から脱獄した）。

寡婦の問題はインドで重要な女性問題の一つであるが、サティ（寡婦殉死）の問題を中心に扱っている本は日本で本書が初めてではないかと思う。インドで妻であることは社会的地位があるが、知人達が寡婦になると様相が一変するのを私も見てきた。寡婦の状況は今日のインドでも悪い。

結婚して間もない一八歳のルーブ・カンワールが一九八七年九月四日にラージャスターン州のジャイプールから車で三時間半のデオラーラ

村で病死した夫と一緒に生きながら焼かれた。(この後サティーについての法律が厳しくなった。しかしループの場合には適応されず最近あった最終的な判決では唯一人有罪にならなかった)。

ダウリー問題については今日ではインドの北や南にかかわらず小さい農村にまでダウリーの慣習が入り込み、女兒の命を奪う原因になっている。二〇〇一年の国勢調査でぞっとするような結果が報告された。

「活気づく経済」、「情報技術」(IT)産業の急成長」など豊かになったインドであっても(今までも)女兒の数が男児よりもだんだんに少なくなっていることは報告されていたが、一九九一年から二〇〇一年の十年間に女兒の人口がシヨッキンゲンほど減少していることを示している。インドでは金持ちの家であっても貧しい家であっても、読み書きが

できない家族であっても、教育のある家族であっても、女兒は望まれないことをこの国勢調査が示している。

インドで最も豊かな州で〇歳から六歳までの男児と女兒の差が最も大きいことがわかったのである。主要な都市別に見ても二〇〇一年のインドの主要な都市の平均が千人の男児に対し女兒の数は九二七人であるのに、ムンバイ(ボンベイ)やデリーでは平均よりはるかに少なくなっている。

男児を望む深く根ざした文化に近年ダウリーの問題が追い討ちをかけるようになり、女兒殺しの慣習がまだあるタミルナードウ州のカツラル族だけでなく都市でも農村でも女兒は命を奪われている。

インド映画の主要なロケ先で自然が美しい山の上の町コダイカナル。そこに住む本書にてくるセルヴィ

は今年一月に会ったときも火傷の傷が痛むという。夫から灯油をかけられ火をつけられたのである。仕返しを恐れて告発をしていないために夫は何の罪も問われていない。私はまた今年コダイカナルで口論の末に灯油をかけられ火を放たれたが子どもを殺すと脅かされて黙って死んでいった女性のことをその家族から聞いた。セルヴィは現在再婚し、結婚生活が幸せなのは嬉しい。

本書は「女は、妻はこうあるべきだ」というジェンダー(文化的・社会的性差)にとらわれた生き方しかできない庶民の女性達についての渾身のルポでもある。

本書とインド理解の助けになればと本書にてくるインド各地を私にくまなく歩き撮影した写真も多く入れている。

『行動するフェミニズム アメリカの女性作家と作品』

稲木妙子、上野和子、須田理恵、田邊治子、寺澤恵美子、永田美喜子、吉原令子著、英米文化学会編
新水社、二〇〇三
定価：二四〇〇円

吉原令子

(法政大学非常勤講師)

正直のところ、私はここ二、三年の間のフェミニズムの動向に疑問を感じていた。というよりも、難解に学問化するフェミニズムに少し嫌気がさしていた。

私が魅せられた「フェミニズム」とは、「私的なこととは政治的なこと

である」という思想に根づいた学問研究であり、それを基盤にした運動や活動だった。私は、アメリカで女性学に出会ったのだが、大学院の授業を通して、フェミニズムは理論と行動の学問であることを学んだ。だから、大学院の仲間たちと共に、テイク・バック・ザ・ナイト（夜を取り戻せ）マーチに参加したり、ポルノの販売に反対するために大学ブックスストアの前で座り込みをしたり、人種差別反対マーチに参加したりした。

しかし、最近のフェミニズム理論や話題の本を読んでいると、これらは本当に女性たちをエンパワーしているのだろうかと思われ、首を傾げなくなる時がある。もしかしたら、「フェミニズムは難しく……」と研究に挫折してしまった女性たちや沈黙させられてしまった女性たちがいるのではないだろうか。

『行動するフェミニズム』は、そういう女性たちにもう一度「フェミニズムとは何か」を共に考えてもらいたいと思い、企画・出版した本だ。だから、フェミニズムに距離を感じている女性たちには、その距離が少しでも縮まる場となることを、私は筆者の一人として強く望んでいる。

集まった筆者（私）たちが、日本で英米文学・文化の研究者であり、偶然にして「女」であったことは興味深い共通項だった。とはいえ、生い立ちも教育的バックグラウンドも異なり、それぞれが共感するフェミニズムのあり方も異なる。しかし、私たちは、学問化・難解化するフェミニズムに違和感を感じ、「理論と行動の学問としてのフェミニズム」に共感することができた。

そこで、本書では、アメリカを中心に活躍したフェミニスト作家を取り上げ、それぞれのフェミニスト作家が「書く」ことを通して、何を訴

えようとしたのか、そして、フェミニストとしてどんな行動をとったのか、に焦点をあてることにした。

本書の中には、十九世紀にアメリカの女性として初めてヨーロッパの特派員となったマーガレット・フラー、第二波フェミニズム運動が盛んになった一九七〇年代に、自己実現や性の解放に挑戦した女性の物語として、かつ、フェミニズム文学として、再発掘された『目覚め』の著者ケイト・シヨパン、第二波フェミニズムの起爆剤となり、高い評価を受ける一方で、多くの批判にもさらされてきたベティ・フリーダン、ラデイカル・フェミニズムの代表格とみなされる『性の政治学』の著者ケイト・ミレット、日系社会の家長長制を鋭くついた日系アメリカ人女性作家のヒサエ・ヤマモトとワカコ・ヤマウチ、黒人女性としてのアイデンティティと深く結びついたフェミニズム思想、ウーマニズムを提唱した

アリス・ウォーカー、境界を越え続けることを生きる指針とするヒスバニック系フェミニストのグロリア・アンサルドウーアが取り上げられている。彼女たちは、それぞれ異なったフェミニズムの視点をもち、その視点に根ざした活動を試みるフェミニストである。

読者は、そうしたフェミニストの姿に己の姿を重ねることができるとも思えない。シスターフッド（姉妹の連帯）は、他の女性に己の姿を重ね合わせ、共感するところから始まるのではないだろうか。そして、「シスター（姉妹）」のために、「シスター」と共に、「私」ができることを真摯に問うことが重要なのだ。

現在も、新進気鋭の新しいフェミニズム理論書が出版され続けている。そのような状況の中で、アクティブイズム（行動）に焦点をおいた『この本は、ある意味で、古臭く感じられるかもしれない。しかし、私は、

ここに今一度、「フェミニズムとは何か」を喚起したい。

最後に、ドナ・ホークハーストとスー・モローが著書『私たちの視点を生きること―フェミニスト・コミュニティをつくる―』の中で、フェミニズムとは何かについて述べたの言葉を記して、『行動するフェミニズム』の書評を終わりにしたい。

フェミニズムとは理論と行動の学問である。フェミニズムは行動への呼びかけである。それは単なる思想ではない。行動がないならば、フェミニズムはすべてを帳消しにしてしまう空虚なレトリックにすぎない。(注)。

注 Hawkhurst, Donna and Sue Morrow. *Living Our Visions: Building Feminist Community.* (Tempe, Arizona: Fourth World, 1984), p.14.

今年の夏は

博多を楽しみませんか？

Weフォーラム2004 in博多

八月七日(土)～八日(日)

会場：博多リーセントホテル

石橋真理子

二〇〇二年の熊本フォーラムで出会った森崎和江さん、野口真理子さん、そして稲畑さんと博多でお会いする機会があり、二〇〇四福岡フォーラムが瓢箪から駒が出るように決まりました。野口さんを中心に実行委員五人で計画を進めています。

全体会では助産学を教える福岡県立大学の浅野美智留さん、長崎でDVサポートグループを立ち上げられた中田慶子さん、福岡で中学校の教員をしながら地域の方とのネットワークを作られている下川京子さんをお呼びして、緩やかな女性ネットワークによるポジティブメッセージを発信できたらと考えています。

分科会は、女性センターの労働についてアミカスの高木美沙子さん、セクハラ裁判の晴野まゆみさん、ケ

ースワーカーをされている山本千恵子さん、北九州市で「君が代」処分を受けた「ココロ裁判」で「北九州がっこうユニオン・うい」の竹森真紀書記長、家庭科からなど、いろいろな分野の方との出会いを作れたらと計画を進めています。

オプションでは屋台めぐりなど博多ならではのものを探しています。今年の夏は博多を楽しみませんか？

……実行委員の紹介……

※野口真理子：北九州在住、佐賀県内の短大で女性学を教える。今年のは年女、その年に実行委員ができるのは、とっても楽しいことが起こりそうでワクワクしています。

岡玲子：大分県宇佐市在住、老人ホームのケアマネージャー・生活相談員。夫婦別姓や婚外子差別廃止への法改正運動に取り組んでいたときにWeを知りました。基本にあるのは、個が単位の（個が本来の意味で尊重される）社会システムを作りたいたいということです。合原理恵（ごうばる・りえ）：福岡

県の山の中在住、小学校教員。今のテーマはDV被害者支援と子どもへの生活的自立。食べ物がおいしい福岡でお待ちしております。

西山千代乃：佐賀県在住、自治体職員。Weと出会って十年、ずっと隠れ読者でフォーラムにも参加した事がないのに、気がつけばなぜか実行委員に！現在のテーマは「自分を知る」です。二人の息子をホームエデュケーションで育てています。

石橋満里子 福岡県久留米市在住、専門学校、大学の非常勤講師。人と人のつながり（例えば家族）を授業でどう伝えるかが私のテーマです。介護、子育てにも大いに関心があります。

※実行委員になつていただける方は、編集室までご連絡ください。大歓迎です。

※前泊・後泊ご希望の方は宿舎（福岡リーセントホテル 電話092-6411-7741）まで直接お申込み下さい。

●眺めが悪い！とみんなに責められた。机の上下に積み上げた書類の山を捨て始めた。捨てても捨てても減る気配がなく、よくもこんなにいるんなことに手を広げたものだ。でもひと回りして（なんとweの創刊から十二年です。支えてくださった読者の方々本当にありがとうございます）、weの読者は（宝庫）とつくづく思うのです。大赤字を出稼ぎで埋めながらも出し続けるのは何よりこの貴重なネットワークがもつたないからだと肝に銘じて。新連載者の鈴木めぐみさんもそのおひとり。浜松市市議で政治を若々しく蘇らせるユニークな活動が魅力です。

昨年山形のフォーラムに行つてからいろんな地方で（男女共同参画）をどのように根づかせることができるのか、ずつと気になっていて。今月号の山梨県の事例は目の覚めるような思いがしたのでご紹介しました。松田常子さんの女性会議の報告もまた粘り強い人材育成とネットワークの構築の記録。後にくる人のために（場）を開き、記録を残すことの大切さを思います。皆さん

の斬新な取り組みをぜひご紹介ください。取材に飛んでいきます。

川口民子さんの表紙は今年のWeを占う「予知夢」のような気がしてしみじみ眺めています。このところ続いた戦闘モードから転じて、私のアタマのながしユールになる（ますます收拾が付かなくなる）ということ？去年の夏ごろから、約十年周期で来るエネルギー下降期に突入したらしく、アタマもヨレヨレになってきたのに仕事は増えるばかりでどうしようと思つたのですが、娘が買ってきたラテンビクスのビデオにつきあつて夜中に踊つてみたら調子がいい。味をしめてサルサ入門とかフラダンス入門も買ってきて、シャンソンも習いだした。今年は歌と踊りで生き延びることにしよう。

渋谷の居酒屋はのえんで四月三日（土）午後三時からトークをします。タイトルは「私たちの働き方・稼ぎ方」なんで私かと思うのですが、気が向いた方はおしやべりにいらしてください。お申し込みは3/24(土)まで。（稲邑）

●もう一人の新連載者は石渡秋さん。女性の働き方、NPO・NGO、教育などを主なテーマとするフリーライタ

1。そのセンスと文章力、お人柄：こういうふうに住事をしていきたいと思う私の憧れのセンパイ。後でお聞きしたら、リニユールしたweを取材に来たら、いきなり発送を手伝われ、読者になり：それ以来のご縁とか。私も最初は読書会に参加したら感想文書いてと言われ、発送を手伝うようになり、いつのまにか編集を手伝つて、フェミックスまで作つてしまい：（その間に離婚して二人の子どもの子育てに追われ）と激動の十二年だったわけ（先日下の息子が無事小学校を卒業いたしました、パチパチ）、シャチャョーの吸引力、訂正、魅力はすごい。そうそう、引越して一人一部屋、新築の住居はとても快適。このまま心地よく過ごせるよう掃除を心がけよう。（中村）

●「男女共同参画山梨からの発信」は、行政と大学と地域住民のコラボレーションが素晴らしい。それに比べ都内では勘違いしていると思われる行政が多く、男女共同参画だから男性にも参加資格があるとかに、定年で暇をもてあましているだけの男性を、ジェンダーフリー講座の受講生として受け入れてくれちゃったりするから、そんな

講座の講師になると、「なんで私がジェンダーのジエの字も知らないおっさんのお守りをしなくちゃいけないわけ？」とストレスが溜まるばかり。女性の参加者は自分の生き方を真摯に考えていたり、自分を変えたいために講座に参加していて、すでにジェンダーフリーについては勉強済みの人がほとんど。そういう人に向けてプログラムを組んで行っても、おじさんたちに足を引っ張られて満足の行く講座ができない。知識を得るためだけだったら大学にでも行ってよと言いたくなる。やはりジェンダーフリー講座は男性だけ集めてやるのがいいし、男性の講師がいい。そもそも男女共同参画などと紛らわしい名称にしたのが、女性差別の視点を曖昧にしてしまった元凶なのだ！（怒）もつとも曖昧にしてしまおうという意図があったからこそネーミングだったのだろうか……ブンプン。（河村）

●また沼崎さんネタですが……脅されてもやはりピルは使いたくないと思ってしまう。だいたい薬を飲むのには抵抗がある。避妊を相手任せにしない、ピルを飲むことでもかかりつけの産婦人科ができる、費用をセックスする相手と

折半するコミュニケーションを築けるといったメリットがあるのもつともだと思いが、100%安心できる避妊法がないのだったら、リスクは常に何を選んでもつきまとう。ピルだけではなく、女性用コンドーム、リングなどそれぞれ色々な選択肢の中から自分で選ぶ方が納得しやすい。女の身体ばかり使ってコントロールするのではなく、男の身体を使って無精子状態にする薬でも開発してよと言いたくなる。セックスするのは命がけ？

友人がお魚の字をデザインした篆書のバステル画を描いてくれた。魚は群れるので人が集まる意味があるという。でも、まず事務所を掃除をして邪気を払わなければ……とも言われ、営業に差し支えるとの危機感から、整理整頓を心がけるようになった。帰りにきれいに片付けてから事務所を出ると、翌朝出勤したとき気持ちいい。新年度はこの職場環境を維持しつつ、「お魚効果」を期待して、読者拡大に努力しているこう！みなさん、どうぞ購読継続、読者拡大にご協力お願いします。（大沼）

●入学、就職、起業……等々のプレゼントとして、『We』の年間購読を送り

くらしと教育をつなぐWe

2004年4月号（121号/vol.13 No.1）
2004年4月1日発行

定価……680円（本体価格648円＋税）
（年間購読料7500円/送料共）
発行……femix・フェミックス
〒154-0001 東京都世田谷区池尻3-2-3-703
tel & fax 03-3424-3603
E-mail: femix@mail2.alpha-net.ne.jp
http://www3.alpha-net.ne.jp/users/femix/
みずは銀行 池尻大橋出張所（普）1501277
郵便振替 00130-7-754314（有）フェミックス
編集……稲色恭子・中村奏子
装幀……川口民子 イラスト……中村 桂
印刷……（有）イー・エム・ピー

●本誌掲載記事の無断転載、複製をお断りします。

ませんか！読者限定のギフト割引として年間購読を8掛け（六千円）にします。お申し込みお待ちしています。

●早々に継続手続をしてくださいました。手続がまだの方には、郵便局で振込手続していただけだと幸いです。なお例年、お振り込みの遅れる方が多いので、ご連絡が無い場合、引き続き五月号までお送りしています。中止の場合はご一報いただけるとう幸いです。（編集部）

読んでみませんか? 不登校新聞

www.futoko.org



当事者の声を掲載

不登校の子どもの体験談、かつての不登校経験者の今を聞く、親の体験談、相談欄など、不登校新聞には、当事者の声が毎月たくさん掲載されています。また、子どもたちのイラストや文通欄、CD評なども好評です。



各地の情報

各地の居場所や親の会の紹介、その月々のイベントや例会の案内など、全国各地の情報を毎月掲載しています。



論説

さまざまな立場の編集顧問の方が、多様な角度で論説を執筆。編集顧問は下記の方々。

- ・安積遊歩(カウンセラー)
- ・安住磨奈(作家)
- ・内田良子(「子ども相談室・モモの部屋」主宰)
- ・大田 堯(東京大学・日本子どもを守る会名誉会長)
- ・小沢牧子(大学講師)
- ・落合恵子(作家)
- ・熊沢 誠(甲南大学・労使関係論)
- ・芹沢俊介(社会問題評論家)
- ・津田玄児(弁護士)
- ・羽仁未央(マルチメディア・プロデューサー)
- ・浜田寿美男(花園大学・発達心理学専攻)
- ・ひろさちや(宗教学者)
- ・本多勝一(ジャーナリスト)
- ・山下英三郎(スクールソーシャルワーカー)
- ・若林 実(小児科医)



最新のニュース

不登校を中心に、子どもに関するニュース、事件、裁判、文科省や各自自治体の動きなど、最新情報をお伝えしています。また、現在の連載は「孫の不登校」や「不登校と進学」など。そのほか、さまざまな企画を盛り込んでいます。



インタビュー

毎月、さまざまな文化人や著名人にインタビューしています。その一部は単行本にも(『この人が語る不登校』講談社・1500円)。最近では、歌手の加藤登紀子さん、喜納昌吉さん、作家の中山千夏さんなども登場しています。

ご購入のお申し込みは

お近くの郵便局から、購読料をお振り込み下さい。月2回、1日・15日にお届けします。

※ホームページからのお申し込みも可

●発行回数 月2回

●体裁 プランケット版(大判)6P

●購読料 6カ月4800円

1年間9600円

●口座番号 00100-6-22077

加入者名 全国不登校新聞社

●お問い合わせ

TEL 03-5360-1231

FAX 03-5360-1232

E-mail tokyo@futoko.org



Non Profit Organization
特定非営利活動法人

全国不登校新聞社

Phone 03-5360-1231(東京編集部)

mail to: tokyo@futoko.org

購読ご希望の方は、編集部にご直接お申し込み下さい。電話、ファックス、E-mail、あるいは郵便振替で○号から購読希望と明記して年間購読料7500円をお振り込み下さい。

- 定価 680円 (本体価格648円+税)
- 年間購読料 7500円 (10冊/送料共)
- 郵便振替00130-7-754314フェミックス

「くらしと教育をつなぐWe」は、もともと家庭科の男女共修の実現のためにスタートした月刊誌ですが、従来の家庭科の枠を超えて、女と男が対等に生きることができる社会の実現のために必要な、さまざまなテーマを取り上げ、特に教育現場において性教育やいじめ防止教育なども包括した「男女平等教育」の実現と、「男女共同参画社会」実現のための具体的なノウハウを追求します。

■2004年度特集

4月号 (121号) 地域で取り組む男女共同参画

■連載

女が歳をとるといふこと 木村栄◇わがまま映評 満田康子◇乱読大魔王日記 冠野文◇過去を振り返らない/先を考えない 松本一郎◇みんなで楽しく政治をしよう! 鈴木めぐみ◇仕事場の周辺から 石渡 秋◇私の好きな言葉 二見れい子

■女と男の家庭科新時代

授業実践/風がかわる匂いがかわる 新・オホーツクの潮風荒く 江口凡太郎◇曲がり角の家庭科 梶原公子◇カトーさんの授業スケッチ 加藤昭仁◇「ひまわり」の日々 入江一恵◇“覚醒”と“自立”のための「ジェンダー論」 沼崎一郎

◎バックナンバーも販売しています。バックナンバーのリストをご希望の方はお問い合わせください。

■2003年度特集

4月号 (111号) ジェンダーフリーを阻む男の病/5月号 (112号) みんなのフェミニズム/6月号 (113号) スキルズ・フォア・ライフ 生きる力/7月号 (114号) 元気になる性教育 /8/9月号 (115号) 《公平》な制度を考える 年金・DV/10月号 (116号) 子どもが元気になる場所/11月号 (117号) 暴力を終わらせるために/12月号 (118号) DV被害者支援と当事者のエンパワメント/2004年1月号 (119号) 働く場をつくる/2004年2/3月号 (120号) 若者の体験空間をひろげる

■Weの置いてある書店■

東 京 ●表参道一ツレヨンハウス
●東京ウイメンズクラブ内 ハッチャクナ
●新宿?丁目 模索舎
●西武津田川・ツラヤ・下

大 阪 ●ウイメンズ・ブックス土アキラ

(店舗のご注文の場には「地方小出版流通センター取扱店」としてお取り扱いさせていただきます)

フェミックス tel & fax 03・3424・3603

〒114-8501 東京都世田谷区北沢3-10-11 フェミックスビル5F501

http://www.femix.co.jp

E-mail femi@femix.co.jp